

釋迦如來誕生會

第一

九土一土は專達也天子以九州爲土(皇極經世)四生一胎、卵、胎、化
火宅一三界無安猶如火宅(法華經)
能仁一釋迦の譯名
一切種智云々一佛智の光明に有情無情皆成佛の氣を與ふ
魔王云々一佛が菩提樹下に坐せし時魔王妨げせしを通力をもて軍兵を捲上げし事
住劫一成住壞空の四劫の一
天の羽衣一劫の長き形容

如是我聞く。九土區々に別れ、四生俗を異にす。長へに火宅に遊び、共に苦海に沈む。故に能仁大師、法界を總て我智とし、虚空を悉して我身とし、一切種智の光明に、蠢々たる懷生喁々たる生類、草木國土、悉皆成佛の氣を與へ、六通自在の神足に、魔軍筵の如く捲て、現世安穩の益を施し、三千世界三世の衆生、惠日に照す大恩教主。チロシ「福量なしとかや。天の羽衣まれに來て、撫とも盡ぬ大石の、住劫の末西域の皇帝、民主王より八萬餘代、師子頗王の御子、淨飯大王と申し奉り、五天竺に君として、萬機を御心に任せ給へども、御即位あつて三十餘年、世繼の太子在さず。善覺大臣の姫君、姉に橋曇彌、妹に摩耶夫人、一二の後に立給ひ、媚を争ひ艶を粧ひ給ふ。中にも御妹の摩耶夫人、去年七月十五夜の夢の瑞、白象胎内に飛入ると御覽じて、御懷妊の月重

れば、大王の御悦び、皇太后宮の宣旨下つて、第一の后に立昇り、威勢といひ位といひ、優るを猜む姉后、素面は清き心の水、底に逆巻く嗔恚の波、起居に募る悪心に、上下の臣下、三千の女御、思ひくゝの最眞々々に、摩耶夫人方、橋臺彌方と、御殿二つに片破れ月の、光りを挑み競ひけり。爰に右の司婆將軍、七寶を鏤めし、玉の御輿庭上にかき据させ、變さても君の御齡、五十に餘らせ給へども、世繼の王子ましまさず、群臣これを歎く處に、摩耶夫人御懷胎とて宮中のよめき、未だ湯とも水とも知れざるを、五天竺の主定まりしなると、夫人を皇太后宮の位にすよめ、第一の后との勅誑。恐れながら粗忽千萬の御計ひ。若し難産にて流産か、又姫宮か、假令男子にても、萬一五體不具にて、

生れぬ先の云々
早計に過ぐる

一天の世繼かなはぬ時は、今の催し徒に、生れぬ前の襁褓定めと、國民の笑種。夫人までも御恥辱。御姉后橋臺彌是を悲み、目出度き世繼の太子を御養子候。則ち迦毘羅國斛飯王の王子提婆達多、利根聰明、御年十二歳とは申せども、其丈一丈五尺四寸、大象をも取挫ぐ御力、古今に秀でし人相、大王の御爲には正しき姪君、天晴五天竺の世繼此上や候べき。はやく親子の御對面と、簾を捲んとする處に、左の司烏陀夷の臣の女房、吉祥女、中門より走出で、小腕取て押退け、言「ヤア我儘なり婆將軍。御身は右の司、

蜎といふ蟲云々
—いらぬ心配の
謎

帝釋天—物利天
の主にて喜見城
に居て三十二天
を統領す

我良人烏陀夷は左の司、天下の政道兩人一同の沙汰なるに、斯る大事を一人の計ひは何事ぞ。惣じて高きも卑きも人間の習ひ、懷妊とあるからは、取上て養育せんと用意するは父母の道。湯とも水とも知れずとて、懷妊を見かけ養子して、生ると子の懸替を、豫て用意し置くとは、さてく御念の入りし事、彼の蜎といふ蟲が、世界の土を喰盡さば、何を喰んと歎くといふ、蟲同然の深用心。橋曼彌のお好みか、但御身の勧めか。御世繼は懷胎の王子。御養子はかなはず。サア此興早く昇出せ」と、轆を叩いて演にける。提婆輿より跳出、雷の如き大音上、「ヤア憚りなる女奴、鷹が輿に腕をさすは、稚きとて侮るか。言ふ事あらば汝が良人烏陀夷を出せ。二言と吐かば舌の根引抜て捨んず」と、はつたと睨む兩眼は、宛然日蝕月蝕の、影を一度に見る如く、心も眩むばかりなり。女房はつと身も顫はれ、怖ろしながら猶憶せず、言ヲ、召さすとも我良人參内致す筈なれども、夫婦の中の一子榮特と申す者、如何なる罰にや、心愚鈍に生れつき、はや十歳に及べども、父母をも見知らぬ鈍根にて、烏陀夷が家を繼されじと、鷄足山の帝釋天に、智慧を祈りの日參故、良人の代りの此女、睨まれても怖からず。御所望ならば、此方も目は細くとも一睨み」と、事もなげに言なせば、婆將軍突と出「それく、汝們如き臣下の家さへ、愚鈍

言はれぬ一夢も

梵天―色界の天
主
三世―過去、現
在、未來

の子には繼つがされず。況いはんや五天竺あるとしの主、萬一誕生たんじやうの御子みこに失しつあつて御世繼ごよつぎにかなはぬ時
 汝なんぢら夫婦ふうふは國くにの滅亡めつぼうを悦よろこぶか。御子孫ごこぞの絶たゆるを悦よろこぶか」と詰つめ蒐かる。言いア、言はれぬ氣遣きづかひ
 良人ちやうと烏陀夷宣旨せんじを蒙かうり、典藥てんやく耆婆ぎはを召ましけるに、耆婆ぎは御脈みやくを伺うかげ、御相好ごさうかうを考ひやかくへ、百福
 圓滿まんまん、目出度めだ太子宿たいしらせ給たまふ。斯かる御代ごよには第六天だいろくてんの魔王まわう、必ず妬ねたんで障碍しょうがいを爲なす。四
 種しゆの花はなにて産屋うぶやを葺ふき、萬民まんにん共に長竿ながさに花はなを飾かり、梵天ぼんてんを祀まつり給たまへ。御壽命ごじゆみやう八十一歳はちじゅういちさいと、
 三世さんぜを見通みとおす名醫めいいいの耆婆ぎはが申まをす上うへは、追付おつつけ太子御誕生たいしごたんじやう。此方こなたには御養子ごやうし入いらず。提婆たいはと
 やら申まをす稚せいないお人ひと、姉后あねきさきの御養子ごやうしならば、あれ養母やしほ御の橋曇彌けつどんみ、お膝ひざに抱だれて乳參ちまれ、
 と冷笑えせわらふてぞ居ゐたりける。提婆たいは飛蒐とびかり、吉祥女きしやうにょが首筋くびすぢ片手かたてに掴つかんで、足を宙ちゆうに提ひつげ、橋
 曇彌どんみの仰おほせといひ、婆將軍はしやうぐんを悻もく白物しろものたる女むすめ、サア同心どうしんせずば、直ただに大地だいちへ入いちむ」と、く
 るりくくと振廻ふりまはせば、目眩めくらめき、見る眼めも何なにと生瓢なりひやく、風かぜに揺ゆめく如ごとくなり。言いア、打付うちつけふが、
 引裂ひきこふが、命いのちに替かへても義ぎは背そむかず。殺ころさば殺ころせ」と張合はりあふたり 大王錦おおうぎの几帳こしやうを撥かけ、
 「止とまなんく。あれ引除ひきのけよ」と御氣色みけしき變かはりし繪言えいげんに、流石さすがの提婆たいはもあつとばかり、女むすめを控かど
 と投付なげつけて、上かみを敬うやまひ躡うづ躡まる。大王おおう猶なほも諸人しよじんの心こころを宥なだめん爲ため、大提婆おおいは達だつた多たは或わが姪そひなれば、養
 はねども我子わがこなり。又摩耶夫人またまやふじん平産へいさんあれば、橋曇彌けつどんみは姪そひにして、是猶産うまの子こ同然どうぜんなり。兄

子故に迷ふ一人の親の心は闇にあらねども子に思ふ道にまどひぬるか(後観樂)

弟心たごころ柔和にして、世繼の太子誕生、國太平を祈るべし。提婆は一先づ本國に立歸れ」と、三時殿に入り給ふ。摩耶夫人は姉後の氣を取り兼て、何事も風に順ふ青柳の、嫺々として起給へば、橋臺彌は嫉妬の悲り、胸にふくみし蝮の針、有紫色には出さねど、目に稜立て露はると、悋氣述懐戀無常、善惡共に人間は、何國も同じ心にて、詞かはると聞ゆれど、文字にうつけば天竺も、日本も同じ世話詞、筆につらぬる御佛の、國の教へぞ三重道遠き、鷄足山の三ツの峯、峨々たる岩根踏分て、帝釋天の窟まで、其間十由旬常に參詣稀なれば、道は棘に閉られて、諸木茂つて日影を隠し、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなく、麓の萱原眞葛原、所得させし虎狼、梢に巢をくふ鷲、人を威せば自然、人跡絶えて物佗し。烏陀夷は一子槃特が、智慧を祈りの大願に、供をも連れず徒歩跣足、槃特を誘ひて、日參十日に及べども、今に其驗もなく、親の顔さへ覺えねば、右をいふ間に左を忘れ、火を掴んでは指を焼き、水を歩んで身を沈め、我名を忘れ親の名も、知らぬ愚鈍の闇よりも、子ゆゑに迷ふ父母の、心の闇ぞ哀れなる。烏陀夷木蔭に立休らひ、髪搔撫て涙を浮べ、馬同じ生を受ながら、何とて斯くばかり愚鈍には生れしぞ。此世へ出て未だ十年、罪科爲りし身ならねば、天罰受ん様もなし。親の受くべき天罰の、

御利生—御利益

空伺—打つにか

水突—手續をつくる響の孔
またもの—陪臣

汝が身に酬げしか。如何いかなる病災難やまひのさいなんにも、換かへて親の身に引き受け、せめて嬉うれしい悲かなしいを、辨わきまへる智慧ちゑを與たまへて給たまへ。不便ふびんの者ものや」と泣なければ、父の泣顔なきがほつくぐくと、瞰み上あけみ瞰おろ下おろしわつとばかり、兩袖りやうそでにて顔を覆おほひ、瓦破かっぱと轉まろび伏ふし沈しづむ。「ム、父が歎なげくが悲かなしいか。左程さほどの智慧ちゑの付つけるも、帝釋たいしやくてんの御利生ごりしやう。我信心わがしんじんの納受なふじめ有難ありがたしく」と、感涙かんで猶なほもせきあへず。鳥とり「いざ參詣さんけいせん。サア來きたれ」と、抱だか起おこせども伏轉ふしまろぶ。能々よくよく見れば歎なげくにてあらばこそ、腹はらを抱かえてくつくく、笑わらひ入りたる其顔そのかほ付つ、親も呆あれて愛相あいそ盡つき、物をも言はず居ゐる處ところを、飛とび蒐かつて握拳にぎりこぶし、父が額ひたひを丁々ちやうちやうと、鳥とり「空伺うつけの所爲わざと思へども、又また此罰このはつの増ますべきか」と、最いとど不便ふびんぞ優まさりける。斯かる處ところに谷の岩稜いはかきふえ踏鳴なし、響くつわの音の聞ゆるを、誰たれと見れば婆將軍ばしやうじが郎等らうどう伯了頓はくれうとん、烏陀夷親子うたゐしんこを見ぬ振ふりにて、手綱たづな搔か揉もり乘過のりすくる。烏陀夷聲うたゐしやうをかけ、「ヤアヤア伯了頓、摩訶陀國まかたこくにて某それがしを見知らぬか。淨飯大王じやうはんたいわうの左ひだりの司つかさ、烏陀夷うたゐの臣おみ。乗打のりうちは推す參まなり。下馬げばをせよ」と呼よびかくる。鳥とり「チ、左いふ御邊ごへんは左の司つかさ、我主人わがしゆじん婆將軍ばしやうじは右の司つかさ。殊ことに提婆達多だいばだつたの公用こうようにて、橋はし曇彌たんにの御方おかたへ急いそぎのお使つかひ。鎧よろいにかけて蹴散けちらそふが、ぐツとなりとも言ふて見よ」と、乗出のりいす轡くつわの水突みづつ槌つと取り、鳥とり「橋曇彌はしだんにでも提婆だいばでも、おのれは婆將軍ばしやうじが家來けらい又者またもの。下おろすは下おろして見みすべきか」鳥とり「しや小こ頼しやくなり。下おろまいが何なにとする」鳥とり「チ、先まづ

調伏一人を咒國
するごと

賣人一人

此様に下して見せん」と劔拔放し、馬の太腹ぐつと刺す。刺れて馬は跳上り、跳きを打て立程に、眞逆様に跳落され、岩稜に胸打當、谷底に轉び落、草押分て身を隠し、行方知らずなりににけり。馬「思ひがけなき無禮者に出逢ひ、科なき馬を殺せし」と、四邊を見れば一通を落したり。拾上れば、提婆の方より橋曇彌へ送る文。「ヤ、心得ず。甚麼様仔細あらん」と封引断つて、馬「扱こそく」此文章「健陀羅山に調伏の壇を構へ、摩耶夫人の形を薬人形に作り、梵迦羅、摩迦羅といふ二人の道士を語り、胎内の王子を封じ、夫人が壽命を七日に縮め、忽ち本懐達せん事、踵を廻す可らず」と、讀も終らず、馬「南無三寶さては婆將軍提婆に與し、大王の御位を簞はん爲、橋曇彌を勧め、養子と號し誑しを、我妻吉祥に言伏られ、詮方盡て調伏とや。人こそ多きに此烏陀夷が、此文を拾ひしこそ、彼奴們が運の極め。直に山へ駈上つて、調伏の壇を破らふか。先立歸つて奏問せうか。いやく半時も調伏させては、懐胎の御身の大事。さりながら彼の健陀羅山は、雞足山象頭山を打越え、其道遙に百山旬。假し何萬里あるとても、忠節の念力、翼となつて一飛」と、冠の纓引締め、沓の緒を堅め、装束の欄高々と絞上げ、駈出れば槃特が、足に取付裾を曳き、無念無想の振舞。馬「エ、淺ましや。賣人土民の子にてさへ、七歳八歳より

横折伏―横たは
る事、横折伏せ
る小夜の中
山
(古今集)

たぢく―よる
めく

月毛―白に赤味
を帯びたる毛色
の馬、月にかく

東西を辨へて、物の道理は知るぞかし。甚麼愚痴に生れしとて、摩訶陀國の一の臣下、
 烏陀夷が子にてはあらざるか。をのれ十歳に餘つて、主君の大事、國の大事、親の一世
 の大事とも、辨知らぬ愚鈍さは、不便も失せて憎いぞや。子を持つて辛いとは我身の事
 よ」と齒嚙を爲し、不覺の涙に暮けるが、馬「ハア愚痴の子に絆されて、忠義を忘るゝ我こ
 そ愚痴よ」と斷念り、横折伏せる松が根に、取て引据へ、足迅に、立去らんとせし處に、
 巢籠る鷲の氣も猛く、一文字に落すと見えしが、槃特を引摺み、梢を分て翺り行く。父
 は憧れ木の根に縋り、枝に手をかけ飛上らん、駈上らんと焦る處を、番ひと覺しく又一
 羽、矢を射る如く落來り、兩の膝節太股かけて、はたゞ撲たと蹴爪に懸け、反仰に撞
 と蹴反して、劍を抜く間もあらせばこそ。ひらりと飛で立上り、雲間高くぞ翺り行く。
 烏陀夷は夢見し心地にて、立上れば兩足朱になつてたぢく。馬「エ、如何に上見ぬ驚
 なりとも、言はば鳥類爪鐵石にもあらばこそ」と、踏立れば躑々々、歩めば骨も碎くる
 ばかり、五體に應え一足も引ればこそ。馬「扱しなしたりく。一代一度の大事の瀬戸、目
 前死する子を振捨て、忠を勵む烏陀夷が身を、天も見放し給ふか」と、撞と坐して大聲上
 け、恨み歎くぞ道理なる。天も誠の心を照す、月毛の馬に柴負せ、十五六なる山樵の、口

尾筒一尾のねもと

有頂一九天の中
の最上

取て来る綱の前、甍寄て無手と取り、鳥 此馬借た。重ねて屹度返禮せん。サア〜柴を下
せ」といへば、「ヤレ〜味い和郎がある。駄賃取る馬でない。今日の市に外れて、此柴賣
らねば咽が乾る。是非借たくば雨降か雪降、隙な時貸てやる。それまで此處に待て居や」と
と、引立るを猶扣え、鳥「必定是でも貸まいか」と、劍を抜て閃かし、振廻せばハツとばかり、
怖れて四邊へ寄付す。其隙に安々と柴切解き、木の根を踏へゆらりと乗、一鞭くれて乗出
す。鳥「どつこい遣ぬ」と飛蒐り、尾筒を取て、「何處へ〜、晝中の馬盗人、サア遣て見よ。
尾筒が抜けるか、小童が腕が離るよか。仕上を見よ」とぞ引たりける。鳥「ムウ盗賊と思ふは
道理。淨飯大王の臣下烏陀夷とは我事。后御懷妊に妨けありて、健陀羅山まで急ぎの公
用。延引して大事に及べば、五天竺は闇となる。下郎ながらも王土に住で、天下の大事
を思はば、此馬貸て得させよ。太子御誕生あるならば、汝を寮の御廄に召置べし。如何
に〜」といひければ、飛退去て頭を垂れ、鳥さては一天の君の御用かや。慮外申せし勿體
なや。馬は悪か草も木も國王の物、王土に生ぜし柴を苜、今日まで命を繋たる、御報恩
は此度。小童が在所は流沙の川邊、車匿童子と申す者。上は有頂、下は大地の底までも、
君が爲には御供」と、馬の口に引添ふて、鞭打かれてハイ〜、嶮岨嶮山岩石岩壁、

卯の花月一四月
八日と因果經に
あり

葉一^{天の甘露}
ころがい一^{尤目}

花供養一^{灌佛會}
とて花を捧げ水
を灌ぐ<sup>(公事根
源)</sup>

緞一^{緻密に織れ}
る絹布
三十二相一^{足下}
平滿の相、^{足下}
輪形ある相、^身
毛上に懸く相等
三十二ありて佛
陀の相なり

山川谷川跳越え駈越え、飛ぶが如くに三重年月の、行足迅き甲寅、御産にあたる卯の花月、耆婆の教へに隨ひ、歡喜園に産屋を構へ、百花を以て飾葺き、夫人の御座は、百重の錦八百重の綾、吉祥女を先として、數千人の官女達、天の漿、かうがいの杯、千顆万顆の寶を捧げ、月卿雲客残りなく、賤山樵にいたるまで、長棹にいろ／＼の花を翳の捧げ物、夫人を慰め參らする。末代三國凡べて、卯月八日の花供養、佛法流布の因縁なり。御快けに摩耶夫人、「なふ方々、世の人の懷妊は、十月の苦み種々なりと聞けるに、不思議や我胎内に、王子宿らせ給ひても、常より心涼しくて、身も軽く覺ゆる上、一天下の万民の慰め勇むる嬉しさよ。殊に此花の、色香すぐれて咲たるは、無憂樹といふ木にて、文字には憂ひ無しと書く。一枝折て王子の無憂を祈らんと、右の手を舉げ、枝に取付き給ふ時、八日の朝日御身を照し、天に音樂異香薫じ、夫人の右脇、蓮の開く如くにて、降誕あるぞ、三重有難き。五色の蓮華湧出して、太子を居ゑ奉る。天津繪の妙色衣、御腰に纏はれて、三十二相の御容。三千の官女、五千の侍從聲々に、御産平安、世繼の太子御誕生、萬々歳」と呼はる聲、王宮響き渡りけり。御母夫人は嬉しさの、餘りて心の疲れかや、無常を示す方便かや、「あつ」とばかりに御色變り、萎める花と消え給ふ。「これはく」

七覺—七法の眞理を云ふ、爲七覺故行七步(佛祖統紀) 獅子吼—所言不怯名獅子吼(勝鬘經寶窟)

と官女達、抱き起し呼助け、御藥種々の、看病更に甲斐もなく、終に締斷れ給ひけり。

太子は圓智明らけき御顔、七覺を表して七歩み、左右の御手を獅子吼して、天地に指し

微妙の御聲、「天上天下唯我獨尊、無量の生死今に於て盡せり」と、宣ふ御聲の中よりも、

難陀跋陀の二龍王、雲を凌ぎて天降り、口より溫湯熱湯を吐き、産湯を灑ぎ奉つる。宛

がら甘露の瀧津波、流れの末の童男童女、酌で掬んで額に灑ぎ、口に含めば口香り、無

病延命なりとかや。旃檀鷄舌沈水香、丁子香安息香、五ツの香まじはつて、四河の流れ

も芬々たり。今の世までも嬰兒の五香の良藥、是此佛の方便力、有難しく。龍王は金

色の鱗を垂て卷下り、摩耶夫人の尊骸を頭に戴き、光と共に忉利天へぞ三重迎へける。

斯る處に嬌曇彌婆將軍、官兵引具し産屋の内に亂れ入り、大音上げ、「摩耶夫人は難産

にて死したるとや。道理がなく。濕生化生はいざ知らず、體を受て生ると者、人間も

畜生も、出生の門は只一ツ。出所を取失ひ、母親の横腹を引裂て生るとは、惡魔の所爲

か狼狽者か。親殺しは五逆の第一。五天竺の王位に立つべきか。能ふぞ、自が提婆を養

子にしたるよな。彼の生れ子は姪ながら妹の敵。あれ捻殺せ婆將軍「承る」と大勢か、一度に哄と取廻す。「心得たり」と吉祥女、太子を抱き奉り、莞爾と笑ふて、「定て御兩人御出

より人形―夫人
身代りの人形

あらうと覺悟して、今かくと待たるに、さてく遅ふて待兼たり。それ官女達、用意の御馳走合點か「心得たり」と手ん手に捧げし花の棹、押取りく、鉾を仕込し寒竹に、搔投り捨たる花軍、花を散してかよりける。「ヤア事をかし女業。大地に劍を植ゑ、刃を雨と降せばとて、婆將軍が片腕、片端打折捨んずもの」と、飛蒐らんとする處に、烏陀夷馬を乗放し、車匿諸共突と入り、「太子御誕生、御母夫人薨去といひ、早速參る筈なれども、臍を些と怪我致し遅參は御免。承はれば彼の太子を親殺しとの御評説、いかなく、夫人は別に殺人あり。いで其證據」と、車匿に持せし薬人形、取て突立て、「これ摩耶夫人調伏のより人形、生れ年御名を書、封じこめしは覺えあらん。祈り處は健陀羅山。願主は提婆達多、憍曇彌。是此願書が物をいふ。ヤイ婆將軍、汝們が人を殺すは薬人形にて迂遠し。近道の殺し様教へてくれん」と、劍拔放せば飛退去り、「チ、其方から教ゆるか、此方から教ゆるか。太子諸共討取れ」と、數萬の官兵、喚いて蒐る。「物々しや」と入亂れ、歡喜園の南門を、捲立てぞ三重追拂ふ。隙間を見て婆將軍、東門より忍入り、吉祥女を取て引伏せ、太子を奪ひ取らんとす。車匿童子取て返し、婆將軍が髻を掴んで、眞逆様に跳反し、馬乘に控と乗り、「此小童を誰とか思ふ。柴賣の車匿童子、今日より太子の御

平緒一楚東の肩
に垂る、緒

まやく馬一驛
馬
善惡不二―迷の
本は妙理ありて
悟りと同じ故に
不二といふ
如意寶珠―諸願
意の如くなら珠

風は虎―雲從
龍風從虎(易)
六十四部―印度
に行はる、外典
一切の書

馬取。御奉公の手始め」と、劔引たぐつて首を搔んとする處を、烏陀夷遙に聲をかけ、「アアく殺すなく。御誕生の大吉日。助けて歸せ」と呼はれば、引起して、車「エ、をのれは果報者。去ながら目見え奉公しるしの爲、御厩の車匿が口取る様はまづ此通り」と、袖引斷つて婆將軍が、口に捻込み捻込んで、平緒手繰て頭をかけてくるく巻、餘る處を手綱に控え、「サア轡、心の好きお馬。鞭の鹽梅覺え置け」と、杖振上げて磔と撲てば跳上る。「跳ね馬じやく、馬放れ馬、心任せに跳ね廻れ」と、打立てく追放つ。善惡不二の御産の紐、卯の花染の産衣を、末世の凡夫に打着せて、天上天下の初聲は、我們が爲の如意寶珠。無量の寶を得る事も、只一佛の慈悲深く、三千世界恵みあり、感應あり利生ある、信心の徳有明の、西にかくれて入る月の、東に出るが如くなり。

第二

風は虎の嘯くに隨ひ、雲は龍の上るに廻る。天の感應時を得て、月日重る御太子、習はすして諸々の技藝に達し、傳へずして六十四部の諸論に通じ、七歳にて鐵の的七重を

還山櫻—疎遠に
望ふあの、もの、
何やかや鏡鬼の目一傍に
あるを氣付か
ずして俄に求むる
態

射徹し、十歳にて白象を城外に擲ち、一切智を兼ね給へば、悉達太子と名號奉り、十歳にぞ成り給ふ。輝くばかりの御容貌、天上の御榮華、何不足なき御身にも、出離生死の御營み、三時殿の高樓に、花落鳥の啼音にも、無常を觀じましますれば、數多の後も遠山櫻、餘所に散行く其中に、耶輸多羅女は十七歳、阿私大臣の一人姫、五天竺第一の美人の名取心まで、戀に我が張る御氣質、氣を揉み焦り玉ひても、終に一夜も肌觸れで、未だ紐解ぬ初花に、何時濡初し露の玉、ころりと側に寢たばかり、夢にも逢瀬なかりけり。蘭香蘭志二人の官女もどかしがり、「ア、くお詞ほどにもない姫君様、何程太子様外面は引締た顔遊すとも、お床の内では詫語させずば置くまいと、御意なされたはドレ何處に。女子仲間のひけになる。人目を忍ぶ戀ではなし。所も時節も何のその、去嫌ひが入るものか。あれく悉達太子様、あのよもの臺詞なし。ひつたりと抱付て、一度手並を見せ給はば、後はするく此方の物。ア、辛氣や」と言ひければ、耶いやく騒がぬく。何しに太子様此處へはお出あるべきぞ。みづからが戀焦るゝを可笑がり、後で翫つて遊ばんとや。いざ歸らん」と宣へば、眞ハテ翫るとは勿體ない。あれ彼の高樓に「耶眞に左様じや。餓鬼の目に水見えずとは妾が事。嬉しや今日は聞えぬ事も何もかも、言ふ

食嘔痴の餌―此
三毒にかゝりあ
ふを餌に譬ふ

比翼―雌雄合體
の鳥三才圖會)

立がらし―立て
てかひなき事

て除ふ」と、走寄らんとしたまへば、周圍に色々の籬の名花咲埋み、道を隔つる花の關、踏分越て往かふか。いや御祕藏の花踏散さば御機嫌損ね、彌々御縁も斷れやせん。風も吹け嵐もせよ。花吹分て自が、思ひの道を開けかし」と、花を恨みの御姿、花も色には恥ぬべし。悉達太子は、花にも人にもお目もやらず、「淺ましや一切衆生、貪嘔痴の餌にかかつて、生老病死の網に入り、無量劫より終に生死の闇を離れず。我大慈大悲を起し、此苦みを抜て、永き樂みを與へんと欲す。歡喜々々」と唱へ給ひし、御容顏の優艶さ。姫は猶しも憧れて、耶左程まで一切衆生、憐み給ふ御心にて、自が此憂思ひ、憐とも思召されずや。但みづからは、一切衆生の外なるか。其お心では今此處で、死んだら定てお嬉かる。死ねなら死ねと宣旨あれ。死に兼にやしまい」と宣へば、宣エ、もどかしい。これ眞に太子様も餘りな。高いも卑いも女の習ひ、良人に添へば、晝は側に吸付き、夜は比翼の枕を並べ、問ふつ語つ打解てこそ、子生るよ鹽梅なれ。おいとしや耶輪多羅様、綾錦で身を飾り、后といふ名ばつかり、御夫婦のしるしもない。精進の立がらし。寧そ女夫かけ向ひで、瓔珞より安樂に、手鍋提て天冠より、藥罐が優じゃ」と喚きける。太子も發心の色目を人に悟られじと、籬に立寄莞爾と笑ひ、「恨みは道理。去ながら、枕を重

芬陀利花—白蓮
華にて花中最勝
の妙色
穂に顯る—顔に
出づる
薄紅—薄きにか
く
梅陀羅—爲んに
かく
俱運—呉れよに
かく
千々の金法—千
金
樽應—せんにか
く

ね肌觸れて、愛慾に溺るよばかり、妹背の契りにあらばこそ。一つ心に月を愛で、同じ梢の花を眺め、心の合ふこそ誠の夫婦。彼の花に舞ふ胡蝶、番々はありながら、子とて生たる事はなし。番が同じ露を嘗め、心を通はす契にて、花の中より子を生す。人間とても其通り、誠の心ぞ夫婦なる。雌蝶は御身、雄蝶は磨と觀念し、花に心を留めたまへ。必ず懷妊あるべきぞ。是を夫婦のしるしにて、色に執着し給ふな」と、御戯ふれも世の教へ。耶輸多羅女は打笑ひ、「終に覺えぬ染々としたお詞は、雨夜に月を見付し心、三歳が内の初花ぞや。いざ／＼花に擬へて、思ひを問ふつ問はれん」と、袖打かくる八重籬、寄れば露散る香散る、匂芬々分陀利花、摩訶分陀利花咲亂れ、咲しなだれてしなくと、品好く慕へ慕ふとて、誰か悟もじ輪丁花。花の睦言これ見よ顔に、戀ぞ積りて穂に顯れて、蕾が孕む波羅蜜花、我身は甚麼に如何なれば、他生の縁も薄紅の、濃紅に色見せて、何梅陀羅花甲斐もなき、仇の枕の起臥を、花も推して俱蓮陀花、戀といふ字に誠のあらば、替じや千々の金法花、浮名は何と梅應花、ある名あし名のいろ／＼に、摩訶曼陀羅花、曼珠沙花、匂はば匂へ咲かば咲け、稀の情の言の葉は、我身に開く優曇花と、詠め譬ふる詞の花に、金銀二色の揚羽の蝶、飛連れ／＼飛纏れ、露を含みて口と口、戯れ

出離—俗界を出てはなる

言成—然らざるをそれらしくいふ
須彌山—梵語にて妙高と譯す七山七海環列して其高三百三十六萬里とあり

寄てさつと散り、じつと寄つては又染々と、好い中々の思はせ振、花の眞實人間の、妹背の道も餘所ならず。少時眺めて三重おはします。胡蝶は空にて羽と羽、打重ね打覆ひ、耶輸多羅女の御袖に、飛入るよと見えけるが、子胤宿ると覺しくて、胎内重く苦み給へば、二人の官女抱きかよえ、御身を擦り勞りける。太子は今ぞ願成就。后の心宥めし上は、留むる人はよもあらじ。出離の時こそ來つたれと、白虎門に出給へば、陳正干、會啼君、二人の宰官突と出、「何處への御幸や候。君御出家の御望みある山、御父大王深く歎き思召、我々御門を守つて、忍びの御幸を屹度止め奉れとの勅詔、默止難く候へば、通し奉る事は叶ひ難し」と申し上る。忒ム、我出家の望みとは誰人が奏しけん。皆世の中の嘘言よ。何を託に出家せん。王宮の樂みに優る事のあるべきか」と、左あらぬ體にて青龍門に出給へば、烏陀夷夫婦出迎ひ、「これは何處への御幸にて、馬車にも召されず候。情なや君十善の寶位を捨、御出家の御志、御父大王を始め奉り、我々は申すに及ばず、百僚百官、下民間に至るまで、天下の歎きに候。何御不足の御發心。御心に適はぬ事あらば、我々夫婦密に仰を蒙らん」と、世に染々と奏すれば、忒それは人の言成しよ。斯る凡夫の身を以て、浮世の羈を離れんとは、蠢にて海を滾え、燈心にて須彌山を引寄せ

んとする如く、中々思ひも寄らぬ事。殊更、人界の羈絆といふは妻子なり。耶輸多羅女が胎内に我子あり。生れぬ先より子に羈絆され、出家とは思ひも寄らず。皆々心安かれ」と、誠にやかなる御方便。吉祥悦び、「ヤア耶輸多羅様の御懷妊、それは先ア御眞實かいの」忝「ハテ何しに僞らん。あれ花園に」と宣へば、夫歸は勇んで御供し、後に近付き參らせて、身お身が重うなつたとや。目出たいく。去ながら、日頃お床も別々で、何時の間にやら油斷のならぬ。どれお腹をと、吉祥女、懐に手を入れて、「チ、眞物じやく。是から御身持猶大事。お風があたる。先奥へ。サアそろく」と手を引けば、眞に一夜もしつほりと、面白事も無ふ、妊娠になつて苦しむは、いかい損じや」と御戯れ、生れ給ひて御名をも、羅喉羅尊者と三重聞えける。されども烏陀夷は心許さず、十二の大門、六十六箇所の小門、築地の端れ、堀の橋にも心を付け、其身は宿所に歸りける。猶も宣旨重くして、夜にもなれば百人組の番手を替え、五十人宛寝ずの番、御門々々に屏風折の錫鉸、取置の柵をふり、鳥も通はぬ御殿の様、宛がら科人の禁獄なんども謂つべし。頃は二月七日の夜、悉達太子は欄干に、はや入る月のあと暗き、空を見るにも人間の、月をば月と愛る故、入るさの闇に迷行、世間の榮華を樂むといへども、四顛倒の憂ひ少

四顛倒一淨樂
我常の四の窓
望也、顛倒とは
心の錯亂する意

平等大惠一佛智
の用能く衆生の
諸機を攝し化益
平等にして能く
因果を得しむる
を云ふ
流轉一生死に迷

押かけ三繫一馬
の頭、胸、尾より
鞍に繋る細結
もいしくもよく

時も離れず。只目前の境界に迷ひ、來世を知らざれば、翼なけれど鳥類に等しく、毛を
着ねども獸に同じ。「ハア南無三寶。生死の大海に漂へる一切衆生、我平等大惠の船を
浮かべ、大悲の棹を取らずんば、流轉の波路は任意越さじ。時こそ來れ」と扇々を過給へば、
春の夜ちと短ふして、宵寝熟睡の後達、前後も知らず寢入端、誰咎むる人もなし。「東門
よりや出べき。南門よりや出べき」北も西も篝火畫の如く、數千人の番衆、目を怒らし
鳴を靜めて守居る。丑寅の小門一ツ、柵はあれども銳空しく、番も心や疲れけん、互の
膝を枕とし、袖を片敷く高敷。「出離の門は此處なり」と、數多の番衆が枕の上、氷を歩む
御差足、虎の尾を踏む心地にて、やうく過行き御厩近く、「車匿やあるく。金泥駒に
鞍置て、引て來れ」と、忍びやかに宣旨ある。車匿寢耳に「ハッ」と驚き、取物も取敢ず、黃
金の轡珊瑚の鞍、押かけ三繫、腹帶拵締め引立たり。太ヲ、いしくも仕たり」と引寄せ、
ゆらりと召すまよに、「是より丑寅の山、檀特山まで駒進めよ」と宣へば、車匿夢とも辨へ
ず、御馬の口に緇付、さめぐと泣けるが、車夜は丑滿に更渡り、御遊御狩の時にもあら
ず、朝敵退治の日にもあらず。これは正しく御出家の、浮世の名残の御幸かや。聽て御
即位の御馬の口、目出たく取らんと存せしに、思ひの外の御有様。思召留り給へ」とて、

邪正一如一如は
 眞如の理也、首
 楞嚴經に、魔界
 如佛界如一如
 无二如とある
 を云ふ

いざさせ玉へ一
 サア御出てあれ

御足に犇と抱付、咽び入りたるばかりなり。太アツア遅れたり。汝知らずや、煩惱の強敵、
 悪業の軍兵を引率し、輪廻の城に楯籠り、嗔恚の鋒先愛着の鏃を揃へ、迷ひの凡夫を惱
 せり。此大敵を攻滅し、現世安穩、後生善所の大果報を與ふる大將軍は我なるぞ。降魔
 の出陣、此時たり。不思議不思議邪正一如」と、鞭を上げ乗出し給ひける。末法今の我
 們まで、闇路を導き給ふこと、此一足の御門出、有難かりし大恩なり。耶輸多羅女は夢
 覺て、御座の邊りを見給へば、残るは茵御枕、御行方はなかりけり。馬やれ太子落させ
 給ふぞや」と、叫び給へば吉祥女、數多の官女目をするく、御殿の隈々、あらぬ方なく
 探せども、面影だにもあらばこそ。耶輸多羅女聲を上げ、「豫々斯と見えし故、夜の目も
 寢ず、朝夕心をつけけるに、何時なき今日のお情に、心も解て氣も緩み、熟睡みしは何
 事ぞ。尋てくれよ」と伏轉び、憧れ給ふぞ悼はしき。吉祥女力を付け、「御門々々の詰番。
 天を翺り給ひしか。よもや遠くは落給はじ。いざさせ給へ」と御手を引き、北を指て出け
 れば、這は如何に、丑寅の小門開け、番衆四邊に横僵し、昇て行くをも知らぬ體。吉祥
 女地圍太踏み、「エ、これじやもの、道理こそ。皆此處へ寢に來てか。一々に奏聞する。
 首の用心して居や」と、言捨出んとする處を、各々一度に勃然と起き、弓手右手に取圍み、

舌の延びたる一
出過ぎたる口上
五輪—地水火風
空
五體—頭、兩手、
兩足
大童—髪髻亂し
たる形

番頭大音上、「寢に來たかとは女奴。悉達太子を態と落さん爲の空寢入、耶輸多羅女を奪取、提婆達多の后に備へ、摩訶陀國の大王と仰ん爲、僑曇彌婆將軍の仰を蒙り、郎等の伯了頓、番衆に紛れ忍んだり。サア耶輸多羅を渡せ。否といはば、手も足も引もいで取るが、サア如何じや」と、銚先並べて突かくる。喜ハア、誑られた、口惜や。見損ふたか此女。烏陀夷が女房吉祥女。耶輸多羅女を渡せとは、どれ何の口で、舌の延びたる奴們。官女達はおはせぬか。男も女も、五輪五體に違ふたる處は三寸四方、魂に違ひはない。みづからに引添ふて、防げや禦け」といふまよふに、番所の手銚押取れば、若年の官女手に障る刃物提げく、群る大勢弓手になし、馬手に支えて三重防ぎしが、女の働き甲斐もなく、散々に截立られ、吉祥女も大童に戦ひて、耶輸多羅女を楚と負ひ、拔身を片手に提げ、隙間を窺ひ、落行かんくとぞ眼を配る。背後より武士共、「后共に討取れ」と、銚先並べて哄と寄れば、くるりと廻つて、喜ヤア手の悪い。女の背後へ廻るとは、何時の世にある事ぞ」と、突蒐る銚の柄を、片手拂ひにひらくく、はつしくくと切拂ふ。敵は背中を後を目蒐、背後へ廻るを寄せ付じと、我身を捻つて前に受け、横に開いて三重拂ひしが、伯了が銚を受外し、胸前すつばと貫かれ、眼も眩みくらくと、消入る性根

言甲斐ない一掃
あかぬ

鶴首一掃の錠

を取直し、後歩みに躑々と、高塀に背中を付け、「サア最う叶はぬ后様、肩を踏へて築地に上り、何卒彼方へ傳ひ下り、太子の御跡慕ひ給へ。早ふく」と苦しむ息繼ぎ。耶輸多羅女も遣方なく、「いや我ばかりは助からぬ。死ぬるも生るも一所ぞや、みづからを捨て、遁るよだけは遁れて見や」喜いや左様でないく。お命一ツは輕けれど、天にも地にも一ツとない、大事の胤が胎内に、宿り給へばお命二ツ。エ、言甲斐ない。早ふくと諫むるも、共に涙の耶輸多羅女、仰上てうで木に取付、肩を踏へてやうくと、築地を轉び落給ふ。危かりける次第なり。吉、サア今は心安し。をのれ能ふ突たなア。報ひを見よ」と突れたる、銚の穂首を弓手に掴み、ぐつと引抜き、柄をするくと手繰寄り、伯了が左の肩先、胸板かけて截込たり。反仰に返して起上り、吉祥が高股を抜打に丁と切り、兩方半死半生の、惣身は朱に染みながら、蹠跟寄ては礮と截り、打付ては瓦破と伏し、兩眼に血は入つたり。聲を知邊に打合せしは、修羅の街の三重如くなり。運の盡ぬる伯了頼、立砂に躑踏込み、反倒打つ處を吉祥女、這寄りく乗懸り、思ふ様に刺通し、願押上げ、「やア曳」と首搔落し、「ハア、嬉しやく。當座の敵は討取たり。身は寸々の深瘡、命の内に此首を、良人に見せて今生の暇請せんもの」と、提けて立上れば、残る武士餘さ

由旬一六町一里
にて三十里乃至
四十里

摩羅羅一太自
在と譯し三日八
臂白牛に乗る色
界中の獨尊

粟散一小國

じ」と、哄と寄れば截拂ひ、駈寄れば追拂ひ、鬢を口に首引喰へ、劔を杖によるくく、起つ轉んづ立歸る、所存の程こそ三重勇々しけれ。提婆は豫て橋雲彌婆將軍が案内にて、所々に軍勢を置けるが、悉達太子王宮を出給ひ、耶輸多羅女も行方知らずと注進すれば、此上は自身道に待伏んと、中天竺の咽頸、恒河の川邊に向ひける。抑此恒河といつば、岸と岸との間十由旬、藍を浸せる川水に、架れる橋は弓の如く、宛がら天の梯とも、又は龍宮の通路かともあやまたる。提婆奇計を廻らし、橋の行桁に埋火をしたまめ、橋板踏めば燃出る様にしつらひ、「悉達太子を焼討にし、耶輸多羅女を奪取るべし」と、我に劣らぬ左倍軍右倍軍、二人の郎等相具し、今やノノと待程も、古たる梢に黒雲さつと棚引渡り、夜叉の如き異形の者、忽然と現はれ、提婆の前に跪坐、「我々は欲界に住居をなす、狗著耶利外道、伽毘羅外道。君人界に生じ給ひしゆゑ、前生を忘れ給ふかや。忝くも我君は、欲界の魔王魔醜修羅王の再來なり。然るに今人界に交り、色に耽り、耶輸多羅女を奪ひ后とし、王位を望み給ふ事、歎かしと勿體なし。君樂みに耽り給ふ間に、悉達太子成正覺成就して佛法を擴め、五天竺は申すに及ばず、是より東震旦國、又大日本と申す神國あり。斯る粟散邊土まで佛法流布し、一切衆生善心に入り、慈悲を

俱泥劫一百億劫

守る世とならば、われら我々が魔境まきやうの滅亡めつはう目前もくぜんなり。殊ことに耶輸多羅女やうたらかが胎内たいたいに、佛ほとけの胤宿たねやどりたり。はやく女をを打殺うちころし、娑婆世界しやほせかいの佛種ぶつしゆを絶たち、魔界まがいとなして俱泥劫ぐいにくの本懐ほんくわいを遂給まじへ」と、言ふかと思へば、其姿そのすがたがたくもる。雲井うんせいに翔かけり失うせにけり。提婆寛々くわんくわんと打首うちうづ肯たづき、「さては某人それがし間の種ねならぬ、魔醯まけい修羅王しゆらわうよな。面白おもしろしく。悉達しつたつ太子たいしが佛法修行ぶつぽうしゆぎやう、何程なにほどの事ことか仕出しださん。此上こゝは摩訶陀國まかだこくにも望まみなし。王位わうゐに上のぼつて何かせん。佛法ぶつぽうを滅却めつさやくして、上天下界じやうか六道りくだう四生しじやう、三千世界さんせんせかいを領知りやうちして、月つきを手てに取り日ひを握にぎり、四天下しよんてんを魔界まがいとなし、大魔王おほまわうと仰あがれんは掌たなごころの中うちにあり。ヲ、心こゝろよし面白おもしろし」と、大地たいぢをどうくくくく、どうと踏鳴ふみならし、天地てんぢを睨にらんで立たちたるは、誠まことに外道げだうの變身へんしんやと、見る人身じんしんの毛けを立てにける。提こゝ此處こゝに現あられ居ゐるならば、恐おそれて人も寄付よりつくまじ。暫しばらく隠かくれて待まつべし」と、一叢ひとらし茂しげる木こ隠かくれ、皆々みなみな忍しのび待居まちたる。斯かくとも知らず耶輸多羅女やうたらか、命いのち一いちツは遁のがれても、跡あとに残のこりし吉祥きやうじやう女むすめが、身みの上うへ如何いかにと覺束おぼつかなさ。太子たいしの行衛ぎやうゑを何國なんごくとも、訪まふべき人も涙なみだに暮くれ、足あしに任まかせてたどくと、恒河こゝろがの橋はしにぞ着つき給たまふ。「此橋こゝろが渡わたれば他國たこくとかや。所ところの名残なごりも是こゝまで」と、半はんば渡わたり給たまふ時とき、仕懸しかけ置おきたる埋火うづみびの、橋板はし赫くわつと燒やきて、火焰ほのほけ烟けを捲まき上あたり。耶ななふ悲かなしや」と、歸かへれば後のちの欄干らんかんより、猛火まうくわ熾さかんに燃もえ出いたり。折節せりふし魔風まふう砂さを揚あげ、川波かみ岸あしを叩たたく音ね、焰えん硝せうの音ね、風かぜの

風風婆風一世界
賊亡の時吹く大
風

泣く一無くにか

さ、がに一即の
枕詞、衣通極の
歌の句をとる

貴面に「ター」邊
に對面すること
能はず

音。 equal 我に如何なる罪ありて、斯く恐ろしき責なるぞ」と、前へ走ればらんばふう、後へ戻れば毘嵐婆風。 烟は咽に息切れて、泣けども聲の出ばこそ。 袖に拂へば袖燃る。「如何なる罰か報ひかや。 火に焼れ死んより、底の水屑」と思ひ立ち、欄干に手をかけ給ひしが、「思へば胎内に大事の胤を持ちながら、勿體なや淺ましや。 遁るゝだけは遁れん」と、見廻せば青柳の、岸より橋に枝垂れて、風に靡ける柳の糸、「断れて落ば落るまで」と、兩手を伸て手繰寄せ、慥かと取付欄干踏へ、向ふへふはと飛給へば、柳の枝に雪折れば、泣く泣く手繰る力草、重きは深き思ひの念力。 前後は猛火下は淵、遁れ難なき玉の緒の、柳の糸にさよがにの、蜘蛛の振舞宛がらに、糸より細き命の中、危かりける三重有様なり。 提婆どつと現れ出、「命冥加の女め、例へ火を遁れしとて、そもや生けて置くべきか。 彼の柳伐倒し、川中へ押ばめよ」と、焦つて下知をなしければ、左倍軍承り、大の鉞 提け、「エ、死に手間の入る罪人。 火が嫌ひなら水飲せん」と 鉞 振上げ、柳の根本 どうくくと、打つけく、今は斯よと見えし處に、烏陀夷大汗になつて走着き、左倍軍が持たる鉞、無手と擲で、「ム、提婆達多とやらん、終に貴面に能はず。 我們が女房吉祥女、只た今婆將軍が郎等伯了頓と戦ひ、伯了が首を取りは取たれども、深疵を負

ふて亡くなり、最期に申し置し遺言ありて駈付たり。其遺言は先づ此通り」と、鉞押取り、左倍軍が眞額に、「曳やつ」と聲をかけ、打付れば頭の鉢、西瓜を割たる如くにて、くわつとさばけて死してけり。提婆大きに怒りをなし、「彼奴等夫婦は推參者。彼れ討取れ」兵承る」と喚いてかよるを、馬「左知たり」と鉞取伸べ、八方無盡「柚が持たる鉞は、木を伐る木を割る枝下す。烏陀夷は敵の頭割る。骨斬碎く。これ見よ」と、押立られて堪りかね、皆川水に飛込みく、浮ぬ沈みぬ流れ行く。立歸つて柳の大本、きりくきつと捻起し、耶輸多羅女を抱下し、肩に引かけ奉り、「ヲ、哀れなり笑止なり。いとをしや敵の軍兵、火に入るも業、水に入るも恒河の川瀬、罪の深さと川水と、渡り競べて瀬踏して、命の瀬踏瀬滅し、思ひ知れや」と高笑ひ、川風の音どうくくく、渦く淵はごうくくく、恒河の砂踏分て、跡白波とぞなりにける。

笑止—氣の毒
恒河—聲にかく

第三

悉達太子道行

愛別離苦—愛する人と離れ難く別れ苦し
輪廻—生死の境を常に廻りてゐる
五濁—劫、見、煩惱、衆生命の五つの汚濁（阿彌陀經）
水泡—果敢なきを云ふ

山小舟—出られんやとかく

欣求大法—大法を希ひ求むるあやしの云々—見苦しき貧人の仕態

會者定離、愛別離苦の理も、分て輪廻の宮の中、宮も藥屋も凡へて、假の宿を何時までと、五濁に迷ふ水泡の、轉た迷ひを導きて、忝くも悉達太子、十善王位を振捨て、王宮を忍び出給ふ、御慈悲心ぞ有難き。實に宵までは錦の褥玉の床、思へば夢の樂みと、遁れ行衛は法の道、金泥駒の諸手綱、車匿舎人は御供を、現ともいざ白雲の、山又山に埋れて、暮ぬ日影や夕陽山、訶羅陀の池に駒駐て、青龍山を眺むれば、松より落る松風の、松は散さで生憎の、花吹き散らす花の仇。これを見、彼を見るにつけ、熟々物を案ずるに、無爲の故郷を離れ出、何を頼まん娑婆世界。法の教へにあらすんば、苦海に沈みし衆生はさて、何時か生死を出小舟、乗後れては誰が渡さん。立昇る春の霞の幾七重、また十重二十重千重百重、今日に近き梢々も、時の間に萬里の餘所に隔たれば、今朝も千歳の昔ぞや。「我王宮は何處ぞ」と、振り返りく、御涙にくれ給へに、車匿も共に涙に沈み、典斯迄世の中を、思召切し上にさへ、恩愛妹背の御名残、御衣を濕す御涙、況てや残る人々の、御歎きは如何許。先此度は還御もや」と、御馬の口を引返す。空いやとよ車匿、欣求大法の修行には、戀しき人もあらざれば、何に名残の惜からん。歎きてもく、父大王を始め參らせ、あやしの賤のすさみまで、仇の火宅の樂みと、知らで過な

物並一袖を被う
て雨を防ぐ
月をさらす一
光をうつす
摩山一稔なる
にかく

ほろ、一雉子の
鳴聲
迦頻闇羅鳥一雉
子を云ふ(翻譯
名義集)

耳を洗へる一許
由巢父の故事

霧は云々一霧は
不斷の香を焼く
にかく(平家物
語)

ん哀れさに、留めかねたる涙ぞ下り、重ねて絞る袖の雨、一村雨に暫しとて、被く袖笠
笠や、森の雪に染なして、同じ緑の苔衣、霞を縦に霧の緯、瀧の糸筋織かけて、月をさ
らすかさらく、更に人音摩靈山、阿私陀、しゆくた、せつたら山、谷より谷に横
はる、野面の石に事問はん、誰が世に架し橋柱、露滑かに玉葛、九十九曲纏るよ駒の足
かつしと踏ば山彦が、我より先に行く人の、啼て木傳ふ鬪鼠や、猿の三叫び斑鳩の聲、
よひく、毎に獨澄む、月は汲むやと問ふ人も、無き山の井は水寂居て、浮萍茂る花の色、
鴛鴦の番の羽は濡て、嘴振る露の假の世に、ばつと立ては又飛集り、伴ひかはす其風情。
云、エイ何時まで長き契りぞや、怎地車匿、やれ彼れを見よ。彼の茅原にほろようつ、迦頻
闇羅鳥が求食して、雛に餌を飼ふ雛は又、親鳥慕ふ優しさよ。されば生とし活る物、夫
婦を憐み父母の、恵みは猶も彌高き一峯は木深き象頭山、麓に靈河漲りて、深淵瑠璃を
湛えたり。道なき岨を下りては、金輪際かと過たれ、峻き坂に差懸れ、雲を歩むに異
らず。岩割れ水に臍を曲て、耳を洗へるよすがとなり、高嶺の嵐に襟を開きて、塵を拂
へる種となる。じやうぞん妙法の旅ならずば、誰かは通ふ深山路の、露よ雫よはらく
く、拂へど袖に振かよる。霧は不斷のこうろく山、雪山をま山靈窟山、峰を越え谷に

戒定惠一三覺にて煩惱を斷ち心を静め惑を破するを云ふ
常樂我淨一四願の事
彼岸云々一淨世に迷ふに譬ふ南枝云々一成道正覺に譬ふ

妻子珍寶一妻子珍寶及王位應命終時不隨者(大集經)
一佛乘一如來の方便を以て隨一の佛乘に歸せしむるを云ふ

下り、一千三百五十餘里、迷へば遙に隔つれど、思へば近き悟りの道、檀特山にぞ着給ふ。

悉達太子御馬を乗放し、忝あら面白の山水や。峯に戒定惠の梢を竝べ、谷には常樂我淨の川波に、架れる橋は西東、彼岸此岸の柳の髪は長く亂るれど、南枝北枝の梅の花、開くる法の我師は是、住むべき山は此處なるぞ。汝は歸れ」と宣へば、車匿承り、「思ひ寄らざる仰や候。假の御遊の御幸にも、御供は離れ參らせず。人跡絶たる山中に、捨置き歸り明日よりは、御太子とも若君とも、誰をか指て宮仕へ、御顔も拜すべき。如何なる深山の奥までも、唯御供」とばかりにて、聲も惜まず泣居たり。悉達太子も憐みの御涙を浮べ給ひ、「優しき今の涙やな。さりながら是を別れと悲まば、妻子珍寶及王位、親しき友も隨はず、土となり灰となる、無常の別れは如何せん。我成道して主従の縁盡す、不退の友となるべきぞ。ア、此駒よく、汝は法のみちしるべ、撻れし鞭の影までも、一佛乘の縁ぞかし。未來を伴ふしるしぞ」と、玉の冠、石の帶、御衣諸共に脱かけて、「名残は盡す」と宣へば、畜類ながら聞分てや、頭を垂首れ耳を伏せ、御足に舌を付け、黄なる涙を流せしは、日も當られず哀れなり。車「あれ御覽せよ、畜類とても心あり。心賤しき下

岩間水一いはむ
にかく

本來出づべき云
云一無始無終に
て佛法の奥徳

四十七字云々
いろは四十七字
なれども悉曇は
四十二字にてあ
らはしや云々と
いふ

郎の身なりとも、争か見捨奉らん」と、又さめくと泣ければ、太「愚の者の言語や。獨生れ
て獨死す、誰をか友と岩間水。疾々歸れ」と宣へば專「獨入らせ給ひては、衆生濟度の血縁は
何と」太「出入る月の光こそ、我無始無終の伴侶よ」專「いや月には友もなきぞ」とよ」太「衆生
を照ば月は友」專「曇る衆生は、さて什麼」太「曇らば曇れ其儘に、月は昔の友なれや。言じや
聞じむづかしや。本來出べき家なければ、山とて入るべき山もなし」と、是ぞ示しの御詞
歎つ巖踏分て、猶山深く入り給ふ。車匿は主の御別れ、留めかねたる憂涙、伏沈みく、
金泥駒も諸共に、諸膝折て身振ひし、三度嘶き行なづみ、見返り見送る主従の、山路の
名残ぞ哀れなる。別れくくに三重成にけり。花鳥の、聲も姿もかはらねど、名のみ異なる
西天竺、吳竹をしちといひ、ひつたきやとは青柳の、翠は同じいろはにほへと、四十七
字を四十二字、あらはしやならだと手習の、一字々の讀聲の、漏てほのく聞ゆれば、
賤の薬屋の内までも、心ありけに物床し。御悼しや耶輪多羅女、頼むは烏陀夷只一人、
檀特山の途次、提婆が方より詮議厳しく、草木も心許されず、脇道廻り道を替え、波羅
那國の片原、こうふの里にぞ着給ふ。在所離れの一ッ庵、烏陀夷が、我身も疲れたり。
御休息の宿もがな」と、覗けば貧女の針仕事。机に手習ふ髭男、二十八九と見えながら、

世話をかく一世
話やく
せはく—せは
しく

鼻毛の延た一人
に醜弄せらるゝ
も知らざる謎
手本を上げ—手
本を巻終ふる

筆の持様童しく、もちやうわらし、ししやう、師匠か兄か手を探て、ごつ、教ゆる人の年配も、四十餘りの文字一ツ、おは、覺えぬ癖にあて字書く、あたまか、教ゆる人は頭搔く、世話をかくとぞ見えにける。にやうほう、女房見る目に堪えかね、「あの子が不器用は知れた事。此方の様にせわ〜いへば、きよう、器用な者でも狼狽て忘れる。少と休ませたが好いはいの。ア、そこな子もそこな子、時々鏡で顔を見て、髭にも恥よ」といひければ、去髭より鼻毛の延たを見よ。四邊隣に子供も多い。七歳八歳で手本を上げ、四十二字を宙で書く。をのれは此あらはしやならだ手本只つた一行、文字なら七字、十年餘り教へて、一字碌に覺えぬ。篤くりと飲込んで覺えるか。又忘るとこりや是じや」と杖振上れば、子ア、のみこ、飲込んで覺えましよ。御免々々」と泣き居たり。父「サア泣程性根に入りたらば、口移しに素讀から覺えて見よ」と、てほんびろ、手本披けて、「阿」あ「囉」ら「波」は「飲」飲んだか「飲」飲みました「飲」飲んだら一人讀んで見よ「ハアウ何んとやら彼のなに。此頭の字は何んとやら」さて不器用な。最う忘れたか。阿「ハア真に左様じや。阿」其次は何んと「ハアウ此次は何んとやら」エ、愚鈍な能ふ飲込め。此次は囉「エ、ウ〜ま一度言ふて下され」エ、只た今教へる詞の下から忘れるか。此次は囉「ま密と小さい聲で飲込せて下され。餘まり大きふて、咽に詰つて飲込まれぬ」といひければ、

「エエ愚鈍者、腹立や」と、杖押取て立上れば、「わつ」といふて逃廻る。女房周章總付、「性質の愚鈍が、撲叩きで直らふか。怪我でもさせて、愚鈍の上不具にせうといふ事か」夫其甘やかしが毒になる」と、振放して追廻れば、泣くく奥に逃込むを、夫婦も續き追かけて、皆々奥に入にける。烏陀夷つくく見るにつけ、「我子の槃特が、存生へあらば彼の年頃。丈長伸て子供に劣り、阿羅波を覚えぬ愚鈍にて、親に憂苦をかけんより、世に亡きも優なるか」と、不覺涙を浮べし處に、手「あ痛く。最う怵えて下され」と、走出るを、烏陀夷袖に押圍ひ、「泣くまいく、詫言して遣る大事ない」と、能々見れば面相の、槃特には似たれども、髭黒々と定ならず。烏「あれは和郎の父母か」「いや知らぬ」烏「ムウ但兄弟か」「いや覚えぬ」烏「して和郎の名は何といふ」「いや覚えぬ」「これはさて、若又昔誠の親はなかりしか」と、何を問ふても、「いや知らぬ、いや覚えぬ」とばかりなり。「ア、淺ましや。取所もなき愚鈍者、是非もなき生れ性。さては何も覚えすか」「いや覚えて居る。敲かれて痛い。覚えて居る。あ痛く。痛さを癒して下され」と、背中教へて泣顔に、付ふ藥は無かりけり。耶輸多羅女は可笑さながら、「見る日も無慙に笑止なり。親の心を言宥め、詫言あれ」と宣へば、烏實にくく宿かる縁にも」と、手を引て内に入り、案内すれば夫婦立出、「誰人ぞ

付ふ藥云々馬鹿に付くる藥なしの謎をとれり

親の打つ云々
親身には誰も及
ばぬ謔なれども
爰は親の許に置
くは惡しとの意
江南の橋—皇子
春秋にある語
のつとり—すな
は

や」とぞ應へける。鳥我々は旅人、一宿の御無心にと、軒に佇み承はり、御心底尤も至極。親の打つ拳より、他人の擦るが痛いと申す世の譬、後樂とは申しながら、江南の橋、江北に植れば、枳となるとかや。所も替へて育て給はば、大智慧者とも成り給はん。昔より智あるものは貧にて、愚痴なる者は富貴なり。此人相、鷹揚にしてのつとりとした果報の相、追つ出世の親達にあやかりもの」と、宿かる爲の詞の因み、口に任せて言ければ、亭主大きに悦び、「彼奴は夫婦が血を分ねど、命にかけて祕藏子、果報あるとのお見立有難し。これ女房、彼の上臈は凡人ならず。お宿申せ」と悦べば、「見えし通りの貧家の泊、お心安いを取得にて、いざ先お通り。これ智慧なし。彼のお客が目に見えぬか。箒持て掃出せ」子「あつ」と答へて箒押取、二人を戸外へ掃立々々、耶輸多羅女の顔をも身をも掃廻す。耶「愚痴が心の塵埃、かよる宿も浮世ぞ」と、笑ひて庵に入り給ふ。烏陀夷は思廻らす程、槃特に紛れなし。如何して存命へけんと、問まほししと思へども、よしなき事を問懸り、身の上を知られては、耶輸多羅女の御大事と、主人夫婦が詞の端に、心を付てぞ聞居たる。主人斯とも心付かず、女房を戸外に招き、主彼の上臈を目利した。提婆公より御詮議ある、悉達太子の後、耶輸多羅女に極つた。空の月は見外すとも、是ばかりは見違えぬ。

氣ぶまし—氣盛
がる意にていぶ
せき事

世話病—世話や
く事

肩をつく—ハッ
と驚く
不覺—ひけ

同道の武士は何者か。彼の子に果報の人相ありと、間に合ながら言當たり。耶輸多羅女を訴人して、大長者となる瑞相。人を語らひ奪取らむ。耶輸多羅女一人引抱えて、奪取は手間も隙も入らねども、隨者奴が氣ぶさいなり。おことは御馳走に酒買うて參るとて、在所で強い若い者六七人雇ふて置け。こりや其處な愚鈍者、物覺えの無い癪、途でもない口叩くな。彼の男がばたくとするならば、杖なりと箒なりと、手に障る物押取て、撲てく撲据へい。此世話病もをのが可愛さ。必ずぬかるな。皆莞爾と笑顔して、目色ばし悟られなと、密めく聲の端々、漏れ聞ゆれば耶輸多羅女、魂消えて恐ろしさ。烏陀夷にひつしと取付き、「早ふ逃たいく」と、膽を冷しておはします。烏陀夷もむねを衝けるが、「斯くなるからには不覺は取らじ。何十人あればとて、土民風情片手にもよも足らじ」と、劍の鏢元抜き寛ろけ、四方に目をつけ居る處に、主人夫婦會釋して「貧しき我々、御馳走申さん様もなし。されども此里の銘酒の候。これを少とお慰み」と、言せも果す、烏陀夷頭を掉て、「いやくく酒は御無用。我們に悪い癖あつて、一滴にても飲むとひとしく酔狂して、腰の劍をするりと抜き、八方を切て切廻り、男女の嫌ひなく、亭主であらふが、女房であらふが、眞額胸板向ふ臍、參合ふたが浮世の名残。命に懸替ある人

疊かけて―連り

飛鳥云々―窮鳥
懐に入る時獵夫
捕へずの謎

は、我々に酒を飲せて見よ。酒といふ名を聞ても、はや拔度ふて手が癢い」と、劔抜きか
け鐙打鳴し、膝押立て見せければ、主人さては氣取られしと、女房に目配し、詞を控
へて居る折節、何處よりかは北窓に、山鳩一羽飛入りたり、「あれよく」と立騒ぐ、聲に
恐れて梁傳ひ、柵に止りつ飛下つ、彼方此方に飛廻る。烏陀夷鳩は見もやらず、夫婦
が起居に目を放さず、劔に手を掛け、耶輸多羅女に引添ふてこそ控へけれ。主人は捕へ
て放さんと、追かけく騒ぐを見て、天性愚鈍の悲しさは、親の教へは此處ぞと心得、
箒取延べ、はつたと打て打落し、疊かけて打つ程に、命も脱き双翼、縮めて敢なく死し
てけり。主人怒つて持たる箒引たくり、はつたと覗んで、「エ、憎や腹立や。百日千日い
ふ事も、跡方もない態をして、殺すといふ事何時覚え、此惨い目はしたるぞや。飛鳥懐
に入る時は、狩人も是を取らぬとは、情を知れとの世の示し。情は慈悲の替名にて、慈
悲あるものは智慧がある。慈悲知らずの智慧なし。愚鈍の花が咲たよな。此箒で敲かれ
て、味いものか、苦いものか、撲れて見よ」と振上る。烏陀夷飛蒐り、主人が小腕取て捻
上げ、「ヤイ飛鳥懐に入る時は狩人も是を捕らぬ、情といふ事、汝も見事知たよな。彼
の上臈を耶輸多羅女と心得、奪取て、提婆方へ訴へんといふ所存は、情か慈悲か。汝が

心底見て取たる此顔色に驚き、愚痴愚鈍の子を打擲し、我身は慈悲ある結構人になつて、我々に氣を緩させん智略の杖、極重惡人とはをのれが事。誠彼奴が打ちたくば、某糞て取らせん」と、箒に縋れば、某先づ暫く」と、箒を遙にかりりと投げ、瓦破と伏て泣きけるが、某極重惡人とは情なや。善も惡も嚙分て、情も慈悲も存せしが、只離れても離れぬは、子に迷ひての欲心なり。某は林丹子と申す代々の獵師、多くの鳥類畜類を殺し、世を營みし報ひにや、夫婦の中に子は育たず。歎きながらも殺生は渡世、十九年以前卯月上旬、摩訶陀國鷄足山に巢籠る鷲、十歳許の子を搦み、既に引裂き、服せんとせし處を、大臺股にて射て落し、子は安穩に抱留て、十九年育てしが、則ち此愚鈍者。父を問へども覺えねば、國里は勿論、我名をも覺えず、腰に付たる木札に繫特とありし故、今に其名を用ひて繫特と呼候、當座は鷲に魔ての物忘れかと、藥など與へしに、鷲の事も覺えず、次第々々に愚痴愚蒙、耳あつて聞くばかり、目は明て見るばかり、魂は聖旨。持て益なき子なれども、過去生々の因縁か、可愛いとも大切とも、死したる實子が一時に蘇生ると申しても、繫特一人に替はせず。渠が息災延命の大願、梵天帝釋に誓ひを立て、ふつつと殺生止まり、十九年以來、蚊を一疋殺さねば、代々の獵師が、商賣の道知らず、

殺生の外、朝夕の煙を立てん様もなく、貧苦の病に身を責る。此貧乏を譲らうかと、明暮れ不便に存ぜし餘り、耶輸多羅女は提婆より后にせんとの御觸れ、命を取る事でもなし、渠が果報の付時と、悦ぶ處に思はぬ無益の殺生、大願も破れんかと、悲しむも子の可愛さ。腹の立も子の可愛さ、罪爲るも子の爲。善を爲すも子の爲。親でない親、子でない子、如何なる縁を結び置、斯程に思ふは何事ぞ。夫婦が命は取らるゝとも、彼の子が爲には厭はず」と、撞と伏て泣きければ、烏陀夷も扱は我子の槃特、咎めかよつて哀れさの、我身にかゝる涙の露、拂ひかねたるばかりなり。時に武士數十人、狩装束にて哄と入り、「此家へ山鳩入たり。はやく出せ」と聳きける。林丹子聞も敢ず、「如何にも其鳩、是にあり」と投出す。武「ヤアこれは何故殺した。我を誰とか思ふ。提婆達多の御内俱全波羅といふ者。君魔醜修羅天を祭り給ふによつて、毎日獸物千疋、鳥類千羽、犧に供へらる。今日やうく九百九十九羽捕て、今一羽にて御用を缺き、此俱全波羅分疏なし。殺人出せ」といひければ、林丹はつと驚き、「御尤も千萬。此者は我々の一子、長病にて正氣抜け、過つて此仕合。狂氣同然の致せし事、何分にもお詫」と、膝を折り手をつけば、武「いや詫言で濟ぬ事。黙止れ」と睨付る。林「ム、詫言叶はずば、何としてお氣に入る」武「チ、サ鳩の代り

童も同じ云々一
年とつても童に
かはらぬ愚鈍者
主人通れぬもの
主人と關係あるもの

ためつすがめつ
一縦からも横か
らも注目する

に這奴めを殺す。是へ出せ」といひければ、女房泣くく突と出、「人間を殺してさへ、道理が立てば助かる慣ひ。鳩一羽の代りに、人の命を取るならば、浮世に人種あるべきか。童も同じ愚鈍者、何の辨へあるべきぞ。眞平御免」と手を合せ、平伏てこそ歎きけれ。武「ハテ致しい。何時まで言ふとも叶はぬ事。刺殺さん」と寄る處を、烏陀夷押隔て、「我々は主人通れぬ者。鳩も人も、命は同じ命なれども、體の大小拔群の相違。鳩を秤にかけたらば二百目もあるべきか、彼の者は瘦せたれど十四五貫目、算用なしには渡されず。秤目屹度差引し、不足は御邊の太股でも胴でも切て、剩餘を取るが合點か。如何にく」と理窟詰。林丹夫婦も力を得、「サア剩餘を出せく。約束屹度堅めよ」と、ねだれ返して詰かくる。俱全波羅ほうと詰りしが、「いやく、差引もむづかしし。此鳩をかけて見る、這奴が身の肉切殺で、秤目に合せ請取らん。それく秤」と罵れば、有繋の烏陀夷も理に詰り 林丹夫婦は「わツ」とばかり、消入りく泣居たり。如何してか下人共、紫檀の大秤取出し、鳩押取て目を試す。秤の棹は一尺五寸、人は五尺の身の命、生死二ツの中緒にかけて、各立寄り、ためつすがめつ、「未だ輕いく、サア如何程あるぞ。二百十錢三分五りんとある」とぞのよめきける。武「こりや鳩を渡すからは、代りに身の肉、屹度かけて

請取らん。渡せく」と投付る。女房は只泣くばかり。烏陀夷も今はあぐみ果、了簡知らぬ無法の相手、詮方盡て見えけるが、林丹涙押拭ひ一よし〜親子は同じ肉身、某が太股切裂て渡さん」と、庖丁押取り。股押巻れば、烏陀夷押へて、「暫らく〜、血を分し親子こそ同じ肉身なるべきに、元は他人の身を切裂せ、彼の子が行末、慈悲心却て仇なるべし。此處は我に任され」と、繫特を引寄せ、顔つれ〜と打眺め、少時涙に暮けるが、「不便や愚鈍に生れつき、父母四人持ながら、知らねば持たぬ同然、汝を産し誠の親、某能く知たれども、名は言れぬ仔細あり。それは産たるばかりにて、今の親の大恩、鷺の餌食を免れし命の恩、養育の恩、代々の家業を捨、おことが爲に貧者となり、身を苦しめし数々の恩を、一ツも送らぬのみか、有難しと思ふ氣も付かず、不孝の罪は爲らねど、不孝の子となる可哀やな。それさへあるに子の身代り、親の身を切裂せ、其罰誰に當らうぞ。天には梵天帝釋の、おことを睨み給ふらん。悲しさは遺瀬もなし。こりや此太股を切らせよ。時には親の孝も立ち、恩を送る一ツぞや。痛い事は些との間。合點したか」といひければ、有繫骨肉の誠の詞、聞分てや、夫婦に對ひ一禮し、太股を押捲り、「此處を〜」と潔く、卑怯もせぬ心の中、思ひやられて哀れなり。林丹夫婦は「わッ」とば

僅の露の命一多
くの寶にても露
の命を買はれぬ
凹い處へ云々
不祥の集り來る
護君子惡居下
流(天下惡旨露
之類論語)

かり、「彼の子が肌はだに刃やいばを立て、そもや見て居ゐられうか。ア、慘じこらしや」と目を塞ふさぎ、歎なげき沈しづみて分わかちなし。烏陀夷は、「出來でしたく」エ、劍けんを抜きは抜ひいたれど、痛いたいも癢かゆも譯わけ知れらず、思おもひ切きたる顔かほを見て、目も眩くらみ手も顫ふるひ、弱よわる心を鬼おにになし、足あし引ひ寄よせて五六寸、がばと殺せければ反のり返かへり、足手を悶もがき泣なき呻うめく。「ヤレ可か哀はいや」と、父母が抱いだ寄よすれば、「なふ痛いたや、痛いたい」と苦しむ聲。抱かかゆる袖は血ちに染そみ、玉たまを翻ひせる夫婦が涙なみだ、紅葉もみぢに置おける白露しろつゆの、消けえも果はつべき親子の態さま、目も當あたられぬ次第しだいなり、烏陀夷肉にくを提ひげ、「鳩はとの代しろり、サア請うけ取とれ」と投なけだす。但たゞいや目をあらためて請うけ取とらん」と、秤はかりの皿さらに打うち込こんで、衝おもり寄よせ目めを數かへ、十、二十、五十、百、「さてこそく、只ただた百八匁もんめ。大分だいぶ足たらぬ。剩あまつたら返かへやす分ぶん。欲よくには取とらぬ。足を切きて渡わたせ」と喚わめきける。母は憧うちかれ大聲おほこゑ揚あげ、「エ、言いへば言いはるるな。子こといふ子は只ただ一人、三界さんがいを探さがしても、我われ子こといふては是こゝばかり。須しゆ達だつ長者ちやうじや。月つき蓋が長者ちやうじや。五百の長者の寶たからを一いつつに集あめても、僅わずかの露の命一ひとつつ、寶うりて手がなれば買かれもせぬ。又またで人の身みを切き裂さく事こと、生いきやふと思おもふてなるものか。假かり令りやう提てい婆ばの名なに恐おそれ、人は詞ことばの義ぎに逼せまり、言いふて勝かたぬ相あ手てゆるゑ、凹くぼい處ところに水みづ溜たまる。搔か破やぶつてさへ痛いたい身みを、慘じこらしうも切き裂させ、未まだ其上うへに足たらぬとや。若もしも彼あの子こが死しで見みよ。如何いか程ほどの剩あま餘りが來くる。命

愚鈍の扉開く
愚鈍がなほる

をかける秤はない。針の先で突てさへ、五尺の身を苦むる。我身で知らぬか鬼奴們」と、
或は怒り或は啣ち、恨み悲しみ地空を叩き、聲も惜まず泣きければ、烏陀夷も、夫の
林丹も、奥に忍びし耶輸多羅女、一ツ思ひにかきくれて、歎き給ふぞ道理なる。されど
も俱全波羅心強く、聞分くべき氣色はなし。父母の歎きに槃特が、愚鈍の扉や開けけん、
勃然と起て、「ヤイちよこく切てはやかましい。此身を秤にかけて見て、要る程取て、
あとを返やしや」と覺寄つて、秤の皿に足をグツと踏込だり。偶ヤア此秤でおのれが身がか
からうか。臍を引け」と睨付る。槃ム、懸らぬ秤何故持てうせた」と、ばたくばたと蹴散
せば、秤微塵に折れたりけり。「そりや秤折た曲者」と、哄と寄るを、烏陀夷、林丹突支え、
「物の懸らぬは賢秤打折るが大法。國法破る罪科人無事で歸るを手柄にせよ」と、捲り出
し追拂ひ、門の戸ハタと鎖ければ、此猛勢に恐れてや、皆散々に逃失せけり。人々悦び、
「チ、槃特出來たく。一生の智慧始め、鳩の秤にかよる智慧、例しなし類なし」申すば
かりはなかりけり。智慧と愚痴とは秤の棹、智慧重ければ偽あり、愚痴重ければ迷ひ
あり。智慧に進まず愚を捨てず、正直自然は秤の衡、おもりんく、りんとかけては、
厘も違はぬ天の道、誠を以て身の寶、さてこそ末世の譬種、槃特が愚痴も文殊が智慧、

終に羅漢の果を得たり。

第四

風破窓を云々
貧家の住居を
云ふ、風射破窓
燈易滅、月穿疎
屋、難成百聯
抄が
墨衣一住むにか

無想無心無相
にて想は修行を
説いて心不依
之を云ふ
官仕一奉公
器野一器に垂れ
にかく

風破窓を射て、燈火消え易く、月疎屋を穿て、夢なり難し。秋の夜すがら處がら、物凄じき山陰に、岩木を友と墨衣。北に小深き高嶺より、麓にあたつて流れあり。耆闍崛山に雲覆ひ、西は又鷲の御山、岷々と聳へて連れり。雪山に打續き、積る雪は嶺に滿ち、心も澄て頼もしし。御悼しや悉達太子、御法の爲に御身を捨、御命を擲ち給ふこと、破れたる蘂香を、脱棄つるより猶惜からず。檀特山の山籠、瑠璃の御髮剃こほし、御名を瞿曇沙彌とあらため、阿羅々仙人の弟子となり、無想有想を學ばせ給ふ。師を尊みの宮仕へ、難行苦行苦衣、裾を結んで肩にかけ、肩を結んで裾野の澤の、菜摘み水汲み谷に下り、峻しき峰に上りては、薪を樵らせ給ひつゝ、三伏の熱き日も、坐しては足を伸べ給はず、秋の夜の長きにも、一日に胡麻一粒、供御とて聞召されず、冬の夜は寒しと申せども、衣を重ね給はねば、御肌膚をさし通す、風は劔の如くにて、篋れ果させ給ひけり。されども、御心物憂と思召れねば、怠り給ふ事もなし。さればにや、蕭々たる雨

伏魔の―留しの
序にちりり

玉鉾の―道の比
詞

百歌―朝廷

の朝は、草木の花を師匠に供養あり。又巖々たる山路に木實を拾ひては、父母孝養の御
手向、谷の牡鹿梢の蟬、一聲の松の風、池水に映る月影も、上求菩提下化衆生、皆觀
念の便りぞと、荷ひて通ふ伏柴の、暫し休らひ立給ふ、御有様こそ殊勝なれ。同じ哀れ
や、耶輸多羅女、烏陀夷一人を力にて、峻しき嶺々谷々を、尋ね迷ひ給へども、草引
結ぶ庵もなく、問ふべき人の跡もなく、疲れ果たる玉鉾の、道なき岨の巖陰に、人影見
えしは山樵か。『なふ物問はん。淨飯大王の御太子、世を遁れて山住し給ふ御庵室は何處
ぞや。教へて給べ。なふ教へて給べ』と、叫び給へど御聲は、谷を隔てし谷の風、谷の嵐
の吹きつれて、餘所の梢も歎くべし。太子はそれと聞召し、思ひ離れし御身にも、有繫
恩愛不能斷、飛立つばかりの哀れさに、振返らんとしたまひしが、「ア、く無明の惡
魔、我心を誑かす。はかなやな愚やな。館に寄る鹿火に入る蟲、愛欲ゆるに苦しむる。
我れ百敷にありし時は、太子とも言は言へ、身は墨染の山鳥、瞿曇沙彌には妻子もなし。
園に植ては花紅葉、深山にあれば柴薪。暇惜や少時も」と、柴取て肩に掛け、木々の下路
木の葉の雫、打拂ひく、奥山深くぞ入り玉ふ。后は遙に見送りて、「なふあれこそ御太
子。さても窶れし御姿、おいとしゃ、何時の間に、玉の飾を剃落し、綾錦の花の袖、墨に

法性無漏—佛法
至極の眞理

わぐため—縮ぬ
る

六根淨—眼耳鼻
舌身意を清淨に
する

は誰が染けるぞ。風にもあてぬ大事の御身、重き薪を肩に置、そも御命もあるものか。浅ましや悲しや」と、伏轉びく、「せめて彼の御苦勞に、少時なりとも代らん」と、谷に下りんとし給ふを、烏陀夷袂を引とどめ、「御發心の御底意、凡夫の智には量り難し、御修行の妨げもや」と、いへども變る御姿、見れば心もかきくれて、留むる袖も諸共に、絞りかねたるばかりなり。瞿曇沙彌は、仙人の窟の前に頭を下け、「法性無漏の智慧の火は、石にあるか燧にあるか。何を以てか焚く薪、師匠如何」と宣へば、寂寞の扇を押扉き、顯はれ出し阿羅々仙人、木葉衣に肌荒て、ばつと亂れし髮髭は、金銀の針線を、わぐため亂せし如くなり。臉の骨立て、巖に鏡かけたる如き兩眼にて、はつたと睨み、「本覺大悟の智慧の火は、一切の煩惱を燒盡す。汝沙彌迷ふたり。古郷の妻子の縁に依て、一念愛慾起りしゆゑ、修行却て罪障。その業に引かれし薪、枯れても元の生木となる。生木を伐たる殺生罪。汝に與ふる三十棒」と、拄杖振上げ、丁々々。「覺つたるか瞿曇、棒に耳あり舌あり」と、押取直してまた丁々。打つ杖は師の心法、打ると弟子の六根淨、御目も眩み御息も、はや絶々に見えければ、谷を隔てて耶輸多羅女、詞の色は見えねど、目に遮りて閃く杖の、影に手を上げ聲を上げ、焦れ給へど甲斐もなく、師の仙人の杖の音、

大紅蓮一八寒龜
獄無間一阿鼻地獄
にて苦の絶間な
き意

「何も響く大音にて、「清淨水を汲來れ」と、言捨て洞の中、窟戸引立て入り給ふ。漸々とし
て瞿曇沙彌、起直り給へども、打れ給ひし杖暴く、御衣も寸々に、破れ亂れし玉葛、藤
にて結へる水桶を、又御肩に打ちかけて、九十九折なる谷道を、よろりくと御幸なる。
昔は五天の御主、金華帳の内にして、月卿雲客に、侍れ玉ひし身の、御手足に舐きれて、
御爪も缺損じ、あるにもあらぬ御有様、勿體なくも悼はしし。后も烏陀夷も忍びかね、
「如何に御修行なればとて、御身に過ちある時は、此胎内の御子には、何時見えつ見えら
れん。薪も水も我々が、汲運んで參らせん」と、泣々流れに立寄れば、太子御派を浮べな
がら、「水汲み薪樵るばかり、憂苦と思ふ淺ましきよ。無常の刹鬼身を離れず、煩惱業苦
に日を送らせ、日數積て月となり、月重つて行く年は、嶺より落る車の如く、繋ぎも留
めぬ玉の緒の、一生の樂み 翻て、無数の苦患となる。大紅蓮の水を汲み、無間の薪を
樵運ぶ、苦しみに比ぶれば、此難行は數ならず。其處立去れ」と宣へば、互それは御身の苦
提心。胎内の御子を見捨給ふは、慈悲心なしとや申すべき」太「いや胎内の種ばかり、我子
とは思はれず。一切衆生は此沙彌が、最愛し悲しの思ひ子ぞ。無上道を悟り得て、漏さず
濟度せん爲の、修業は大慈大悲ならずや」互「菜摘み水汲む難行は」太「衆生に代る難行苦行」

四つの馬影、
毛、肉、骨に割れ
て驚く馬の喙、
法は乘るにかく
(増一阿含經)
月も袂云々一濡
れたる袂に月の
映るるを上るに
云ひ掛

禪定三昧一專一
に心を割むる
諸法従本來云々
諸法は本より
實相なき者にて
初より常に寂滅
の相なり
十方佛土云々
十方世界には成
佛すべき一法あ
るのみにて他に
法なし(二句法
華經方便品)

「打るゝ杖の心は何と」太「打るゝ杖は折れて知る。鞭の影に驚く馬、皮を打れて駭く馬、肉を打れ骨を打れ、始めて驚く馬あり。無常に驚く譬へにて、四つの馬に法の水、三界流轉の濁江は、何時か汲盡さん。底澄む水を汲ふよ」だんぶくと汲めば、雫に影落て、月も袂を上り坂、たどろくの御難行、涙に桶の水増て、肩重けにも悼はしし。師の仙人跳出「見よく。青山は青く白雲は白し。汝が水は水にあらず。古郷の妻子の影を映せし愛着の洗ひ汁。月宿れば月を汲む。山映れば山を汲む。山月を偷む偷盜罪。六十棒を與へん」と、續け打に丁々々。拄杖も折れよと打つ音は、谷にも響くばかりなり。打れながらやと暫し、禪定三昧に入り給ひ、起上つて桶の水、大地にがばと打あけ、窟の内に入かばり、定印正しく坐し給ひ、「諸法従本來、常自寂滅相。十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三」と高らかに、成道正覺の悟りの金言、窟戸をはたと鎖し給ふ。仙人退去て禮をなし、「善哉々々。釋迦牟尼如來天人師佛世尊、昔の所願満足して、もろくの迷ひの衆生、皆佛道に入れ給へ。我は大通智勝佛却成世界の契りを違へず、阿羅々仙人と現じ來れり」と、宣ふ御聲薫しく、光りを放ち失せ給ふ。此光明に照されて、窟に立たる菩提樹の、枝榮え葉を繁み、佛座を覆ふ若緑、佛天蓋と翻穢たり。后も烏陀夷も夢

四八の云々―佛
三十二相八十種
好身色紫金（法
華經）
他生劫―婆に死
し彼所に生れて
永久

片行―かたまは
五天―五天竺

三寶―佛法僧

心地、隨喜の感涙せきあへず、窟の前に身を擲ち、罪障懺悔ぞ殊勝なる。微妙淨音鮮
かに、尋我無量劫の昔より、無邊の衆生を度せんが爲、娑婆往來八千度、十九出家三十成
道、苦行六年と見るは迷ひの凡夫の眼、一日に一千歳の修行に開く大智慧門」共に開く
る窟の門、出山の釋迦牟尼佛、四八の相好八十種好、白毫の光明は、山河草木六道四生、
人の面しろく、しろと見ゆる。二人は信心歡喜の思ひ、「夫と結び君と呼ぶ、結縁は他
生劫、頼もし嬉れし有難や。是につけても後の世を、願ふぞ誠なりける。砂を塔と重ね
て、黄金の肌濃かに、花を佛に手向つよ、悟りの道に入らうよ。悟りの道に三重入帳
や、昔より、ある處にはあらがねの金銀は寶の最上、一切無間の望みを叶へ、金に優
る物なけれど、片行といふ癖ありて、無い處にはなかりけり。五天第一の須達長者、八
方八萬の藏々に、あらゆる財寶充餘り、月の會花の宴、歡樂を事とし、下人被官の男女
の數々、七百餘箇所の臺處、十六萬の窟の烟、夜晝立たぬ隙もなく、天人天女の榮華も、
是には過ぎじと聞えける。林丹が妻瑠璃仙女、樂特が資緣貢ぎの爲、縁をもとめて下司
奉公、下僕下婢、朋輩づきも睦しく、人の仕事も引取て、碗拭き膳拭き菜大根、洗ひ
揃へも一人して、頭掉る間もなき中に、禪の下に三寶の、御名を唱へて繰る珠數は、我

三界一欲界、色界、無色界

子の出家成就と、祈る心ぞ哀れなる。朋輩共立寄て、「これ瑠璃仙、和女は奉公も能ふする、憎氣もない氣なれども、珠數とやらいふ物、ぐわりぐわりいさせて、何やら呷々嚙語が聞ともない。上に厳しいお嫌ひ、聞えたら追出されふ。先それ言ふて何になる。措てくれ」とぞ笑ひける。問「チ、く」此世では可笑かる。遅いか早いか皆一度は死ぬる身、此珠數のお庇で、此方や金色の佛になり、蓮の臺に天人菩薩に敬まれ、三界を見晴し、優々として居る時、後生嫌ひの其方衆、内方の旦那様始めて、牛頭馬頭の鬼共が、火の車に打乗せ、地獄の底へ引立て行く時、構へて、助けて下され、これ昔の朋輩で御座る、拜みますといふて、泣やるなや。但し地獄が好きなら、何うなりと。此方や先づ怖い」といひければ、朋輩一度に哄と笑ひ、「何時の間に習ふて來た。此頃釋迦とやらいふ人が、靈鷲山で説法とやら、談義とやら、死んでから後の事をいはるとて、參りが群集するけな。其釋迦が猶内方のお嫌ひじや。此方徒は死ねばそれ切、後生といふて何處にあらふ筈がない。サア其所在いふて見よ」
「いや言ふまでもない鼻の先に、現世後生がぶらついてある。知りやらぬか。昨日は前生、今日は此世、明日は來世。一日でいふ時は、今朝は前生、今は此世、晩は來世。明日爲る仕事を今宵の中に仕舞ふて、人の仕事も手傳ひすれ

野良かはくいな
まける
仕べい爲す

ば、朋輩は悦ぶ。御主様には褒らるよ。朝も緩りと寝らるよ。此處が佛、極樂世界じやあるまいか。又野良かはいて仕べい役を授らかし、終其日は暮て来る。明日は朝疾うから叩き起され、昨日の仕残を仕舞ふとする、今日の役は支えて来る。叱られ廻つて物損ひ、何故破たとて頭をクワン。怪我で御座ると分疏すれば、未だ口答へ仕居るか、握拳が棒になる。それからが地獄の責。悔んでも歎いても、昨日が今日に返らぬは、なんと後生といふ事あるまいか。サア言ふて見やく」と、當座の道理に朋輩ども、「言へば實に尤らしい。去りながら、後生は死んで後の事、此世で又旦那の様な長者もある、此方徒が様な者もある、未だ是より下もある。同じ人間にいろくの、次第のあるは又如何じや」璣「ハテ知れた事、皆前生の報ひ。前の世で慈悲深ふ、出家沙門を供養し、人を憐み施した者が長者に生れる。慈悲を知らぬ慳貪者が、此世へ生れて貧乏する。盗みした者は、手無い坊に生れて来る。前生で嘘つけば、啞ごろに生れる。火に入り水に沈むも、皆前の世の報ひじや」と、いへば皆々恐しがり、「さてもく怖い事。和女はいかい物識じや。それなら彼の兎唇は何んの報ひじや」璣「ハテそれも何んぞの報ひであらうまで」璣「サア其處が聞たい。何んの報ひで兎唇には生れるぞ」璣「さても根問ひする衆や。何ぞの報ひと

までも問ひたり
云々―サア又問
うて問詰めて困
ちすかと也

思ふて居や」と、いへども諄ふ問かけられ、「これ兎唇はの、ぶだしなみな口中で、無性に女子の口吸ふた報ひじや」厩「イヤ是は尤。又聾は何の報ひじや」璣「さりと根問する衆じや。聾も偷みした報ひじや」厩「ム、偷みして聾になるいはれが聞たい」璣「さて問ふたり問ひ殺すか。これ前の世で、金を盗んだによつて、其金氣が残つて、朕になるはいの」厩「ム、是も理屈は聞えたが、又朕でもなし、些と聞える。聾は、如何した報ひじや」璣「これははの、其方衆の様に根問して、聞たがる報ひじや」と、いへば皆々色違ひ、「なふ怖や。最う問はぬ」と、逃て退けば、璣「これ〜柎揆頭、璣の報ひを問ふて聞やらぬか」厩「いやいや最う何んにも問はぬ。勿體ない〜」と、各々奥に入りにけり。林丹は打絶えし、妻の便の覺束なく、門に佇み窺へば、瑠璃仙見付走り出、「なふ懐しや。して榮特はいよく〜出家にしたまふか」林「チ、されば〜御身が給分にて袈裟衣調へ、縁を求め、釋迦如来の御弟子にはなしけるが、愚鈍は始めに替らず。舍利弗尊者、富留那尊者、目連、須菩提迦旃延、歴々の羅漢達に、二十日三十日程つづ預けられ、物教へらるれども、一句の喝をも覺へず。指南達もあぐみ果、此頃は有難い、如来直の御指南と聞けるが、慈悲圓満の御心にも、御見限りあるべきが是非なさよ」とぞ語りける。「ア、悔みても返らぬ事。

手の内—自分の
もの
頭陀—抖擻と譯
す—行脚僧

辨—辨償

孀子—妾

假へ一句は覺えずとも、信心さへあるならば、未來の爲と思召せ。それよりも悲しきは、
此主人長者殿、提婆を深く信仰あり。佛法の名字をいふも法度にて、これほどの家なれ
ども、出家の眞似して袈裟衣着たものは、門にも立たせず。下々我等風情まで、手の内
でも施さば、曲事なりとの言渡し。釋迦如來の御弟子達、毎日頭陀にお出なれども、屋
内が通りやくくとて、叩かぬばかりに追出す。人の見ぬ間に、自が、随分手の内參ら
せ、槃特が事問はんとすれど、傍輩の鵝の目鷹の目。奉公の辛苦は身を碎いても構はね
ど、後生を知らぬ邪見の家、此處ばかりに日が照るか。世界に主には事缺ぬ。暇取らふ
と思へども、給分の辨へが、身の皮剥でも叶はぬ」と、歎けば夫も打萎れ、「エ、暇が取ら
せたい。主と病に勝れぬといへども、主には金さへあれば給分立て埒明る。勝れぬもの
は貧苦ぞ」と、夫婦手を取り泣居たり。時に奥より上下の家來、「長者殿のお出」と、ざはめ
けば、林丹は門の蔭にぞ隠れける。須達長者、童子孀子に圍繞せられ、七寶の床にどう
と坐し、須「瑠璃仙女といふ下司女、召出せ」とありければ、家來共小腕取て引出す。須ム、
汝は、長者が家の法度を破り、毎日釋迦の弟子を供養するとな。某提婆達多の正法を尊ぶ
事、五天竺に隠れなし。何んぞや、有もせぬ三世因果を立て、地獄極樂なるとて人民

はとび米が涙
にぬれて彫る

朝喰へば云々
朝食へば夕食は
夕夕に食へば朝
の米だけ残す

を誑かす、邪法僻見の悪僧共に、一粒一錢も、長者が家より施せば、其罰長者が身に受る。家の法度を背く曲者、懐に珠數もあるべし。それ探せ「承はる」と下部共、突と寄れば、瑠璃「これは又あんまりな。悲しや何んにも無いはいの」と、泣けども無體に兩袖振ひ、肌を探せば小袋の、口もほどけて翻るゝ米、こぼす涙にほとびては、餘所の見る日も恥かしし。「こりや朋輩の面汚し、米盗人奴、撲て縊れ」と、口々に罵れば、瑠璃仙猶も涙に咽び、瑠璃「恥しや情なや。御奉公する身が、何乏しうて盗まふぞ。釋迦如來の御弟子達、毎日頭陀の御修行、其日の烟立てかねて、身を賣り妻子を賣る者までも、現世後生の罪を恐れ、志の供養はする。此館で出家といへば、山の猪、猿追ふ様に、門にも立てぬ慳貪邪見、現世は長者殿なれど、如何なる過去の惡業で、佛に縁の無い事や。見て居るも罪科、兎に角未來が恐ろしく、此米は妾が扶持、朝喰へば夕を延ばし、夕を喰へば朝を残し、水を飲でお腹を充て、御修行の羅漢達へ手の内の供養米。佛とも法とも知らぬ衆に、隠さうと思ひ肌に着け、盗人といはれて口惜い。手鍋提て世を渡り、辛い世帯は經たれども、塵一筋盗みはせず。恥かしけれど五穀の類、肌に隠した事はない。是非盗み物ならこれ返やす。長者殿の七珍萬寶も、未來では皆盡果てる。一紙半錢粟一粒、佛界へ擲てば生

終に華公云々
是迄奉公したス
事なき奴なれば
作法を知らず

夾侍―脇立
序々序々―次第
正しく

生世々に盡もせず、百倍百倍にして、黄金の肌となるゆゑに、此女は事缺ぬ。もと受た
扶持なれば、サア返す長者殿。一生に覺えぬ肌懐を探され、盗人の名はついたか」と、
袋をハタと投付て、控と伏してぞ泣居たる。下「ヤアお主に投打つ慮外者」と、犇く處へ林
丹駈出、「ア、これ、手を合せます拜みます。幾重にもお詫」と、長者の前に畏り、「私は彼が
請人。終に奉公いたさぬ奴。お主朋輩の作法を存ぜぬ我儘、申上けん様もなし。兎角お
慈悲は上より御免あつて、召遣はれ下されかし。一ツは現世の御祈禱、後生の爲めの御
善根」と、手を束ぬれば、長者大きに不興し、「ヤイ其現世後生とは何の事。斯る下司女、
長者が内に數百人、何れを孰れ面をも知らず、終に詞もかけねども、我が正法を蔑し、
釋迦を尊む曲者、さてこそ直に穿鑿す。暇をくれた出て失せふ。佛法ゆゑに追出され、
ヲと結構な佛の利生、是でも未だ尊いか。それ家來ども、佛法を信ずれば目前に彼の有
様、能く見て置け」と嘲哂す。夫婦外面はあやまり顔、遁れて出る鰐の口、邪見の罰は佛
の慈悲、これ御利生と有難く、覺えず翻す感涙を、迷惑涙にもてなして、打連てこそ出
にけれ。やゝありて門外に、出る日の如く光さし、忝くも釋尊は、目連舍利弗ふるな
尊者を夾侍として、槃特沙彌は御鉢の役、御容端正に、序々序々と歩み寄り、頭陀を

開場一切善根
を焚燬するもの

請ふてぞ立ち給ふ。長者佶と見、「ム、聞及びし檀特山の水汲小僧釋迦如來よな。佛者と
なれば一切の天人供養して、食物厭充ると教へながら、なんぞや、提婆達多の大法を尊
み、佛法を破る長者が門に物を請ふは。ム、合點たり。天人もはや佛法に懲果、今は供
養をせざるよな。如何に〜」といひければ、ふるな尊者突と出、「天人の供養に付て、義
理多し。耳を翫て能く聞け。誠の天人天降つて供養する事あり。又人間の心に托して供
養せさする一義あり。又佛を信じ供養する人間は、其人則ち天人なりとの一義あり。汝
が門に立てばとて、外道闍提の施物を受れば、三惡道に落つ。此の屋の内に瑠璃仙女と
いふ天人の施物を請けん爲め、世尊來臨ましますなり」と仰ける。長者から〜と笑ひ、
「さては汝們が眼に、下司女が天人と見えたるか。下司天人奴、只た今暇くれて追出せし
は」と、言はせも果す舍利弗尊者、「いや〜、信施の功德廣大にて三世に通ず。施主は
此處にあらずとて、施物に施主の佛性あり。其袋これへ渡せ」とありければ、須「いやなら
ぬ。尤も彼が扶持なれども、それは奉公の内の事。長者が與へし扶持米にて、奉公せね
ば長者が米。汝們に施すいはれなし」とぞ争ひける。世尊晏如として、「止みね〜須達長
者、其米汝が米ならば、袋を持って上て見よ」と宣へば、須「我物を我が取るに何事かあらん」

田すと計り―出
すとすと腕がず
るずると延びて
白紐を引けるが
如しと也

一念發起―懺悔

と袋片手に引攔み、引上れども上らばこそ。須「ヤア見かけより重い物」と、兩手をかけて力を出し、引上げく、引ても上らず、押ても動かす。下人大勢手をかけて、引てもしやくつても、岩の狭間に年経る木の、根をさしたるが如くにて、有繫の長者も空恐ろしく、心迷ひて見えければ、世尊重ねて、「見よく。平等大慧の佛性、一度び佛に供すれば、法界に遍満して、僅か袋一ツの米、法界一切の力と一致して、顛倒の汝們が、例へ須彌山は動かすとも、其袋は動くまじ。懺悔せよ」と宣へども、長者猶も疑念晴れず、「然らば佛、此米取て見せ給へ。但し門へは一足も入る事かなはず。何んとく」といひければ、目連尊者聞も敢ず、「ヲ、我が神通にて取て見せん」と、進み出るを、世尊微笑ましく、「神通もよしなし。施物は鉢に受る法。如何に繫特、鉢に受けよ」と佛勅に、繫「あつ」と應へて鐵鉢を出すよばかり我腕。我も覺えず白糸の、打緒を引たる如くにて、伸て行くこそ不思議なれ。繫特門の外にあれば、手先は長者が目の前に、鐵鉢を指上たり。人々奇異の思ひをなせば、袋おのれと口開け、米は御鉢にさらくくと、箕の如く一粒も、散ず翻れず盛上ぐれば、肱は則ち舊に歸す。神力不思議ぞ有難き。長者一念發起の涙「ハア、淺ましや、過去の業障深く、斯る微妙の御法を知らず、疑ひ誹りし破法の罪、何時の世

八萬の法藏一八
萬四千の時にて
一切の經説

にかは免れん。今までの邪法を棄て、子々孫々まで、不惜身命の大信者となつて宮仕へ奉らん。罪を許してたび給へ」と、頭を叩き五躰をなけうち、罪障懺悔の血の涙、暫し前後にくれけるが、須我等祇園精舎を建立し、提婆を請せんと存ぜしに、如來の御教化受くる事、三世の諸佛も未だ捨させ給はぬかや。あはれ祇園精舎に入御なつて、猶々示したび給へ」と、隨喜の思ひ淺からず。世尊歡喜の御容顏、「善哉々々須達長者、此繫特は愚痴愚鈍、一句一偈の行者なれども、信心の誠萬卷の書論に優り、覺えず我身に自在を得たり。提婆達多は八萬法藏を讀覺え、三千世界にあらゆる學問つくすといへども、邪の道に走り菩提心なきゆゑ、砂を蒸て飯にせんといふ如く、終に三途の闇を出す。身の佛性を暗ませば、愚痴の繫特に劣て、地獄に落る事矢の如し。恐るべしく。我れ今宵切利天に昇り、母の爲に説法す。それまで少時此處にて、汝が爲に説法せん」と宣へば、長者額を土に付け、「有難や忝なや。然らば今宵萬燈を立て、如來天上の道を照し、須達長者が佛に歸伏し奉る、しるしを天下に見せ申さんと、御足を取て押戴き、渴仰なせば釋迦如來、羅漢達を御供にて、祇園精舎に三重入り給ふ。法の燈火明けき、須達長者の萬燈會、星も此土に下るか、生死無明の闇晴れて、宛がら晝の如くなり。林丹夫

中有の云々死
後日々日の迷闇
を照して貫ふ願
ふくる夜一吹く
に計く

汝が信心一汝が
自分の信心を天
下に知らせんと
て也

婦傳へ聞き、「須達長者を御利益あり。御報恩の爲にとて、長者の万燈供養とや。せめて、我も、中有の闇の結縁を」と願へども、一燈の油の價なく、瑠璃仙女が髪押切り、銀錢一錢に代なし、燈籠しつらひ、道の邊りにたてけれども、折ふし風もふくる夜の、油は引て燈火の、光も細き志、萬燈に比ぶれば、晴れ行く月に螢火の、影消押されて淺ましよ。既に御說法事終り、祇園精舎の玉の架橋、如來御幸ましませば、老若男女群集して、佛を禮し奉る。長者の萬燈目を驚かし、「現世も後世も金次第。羨しの果報や。此中に彼の一燈、何んの功德になるべきぞ」と、見る人指し手を拍き、笑はぬ者こそなかりけれ。刻限もはや丑寅の空かき曇り、黒風俄に吹來り、楯を鳴し塵を上げ、どうくくくと吹く風に、萬燈の影ちらくくく、ちらりくくと瞬く間に、萬燈一度にパツと消え、長夜の闇となりけるが、一燈ばかり消残り、猶赫奕と光りまし、忉利天まで暗からず。譏り笑ひし貴賤群集、あつと感ずるばかりなり。長者一家泣叫び「惡魔の所爲か身の科か。世間の聞えも恨めしよ。因果を示したび給へ」と、口説き歎くぞ淺ましき。世尊聞召し、「いやく。此風外より吹くにあらず。汝が信心一天下に知らせんと、我慢に灯す萬燈なれば、汝が一念、らんば、びらんばの惡風となつて、萬燈を一時に打消し、慢心を挫く。

又残りし一燈は、汝が家にありし瑠璃仙女夫婦が供養、則ち此槃特が父母なり。油の價に髪を切り、眞實信心の功德、一子槃特が智慧の光りとなつて、風にも消えず水にも消えず、上は佛界、下地獄界の底までも、此光通せずといふ所なし」と示し給へば、林丹夫婦も立出て、佛を禮し奉る。長者は夫婦を三拜し、「斯る信者と夢にも知らず、侮り苦しめ恥しめし、慳貪罪を許してたべ。現世貧女の一燈も、未來にては如意寶珠。我が長者の萬燈は、未來の糧に盡果、來世は極貧無財餓鬼。許してたべ夫婦の人。助け給へ釋迦如來」と、御衣の裾に繩付、罪を悔みて泣叫ぶ。一念懺悔の其功德、萬燈一度にばうくく。光明四方に耀きわたり、貴賤男女一同に二度あつとぞ禮しける。斯りし處に向ふより、千乗の車引く如く、陸地をとどろに踏鳴し、提婆達多、婆將軍を引立て、一文字に駈來り、山も裂る大音上、搦「ヤアく須達、祇園精舎を建立し、某に得させんととの契約、其使は此婆將軍。何んぞや詞を翻へし、我外道の仇敵、釋迦を尊み、説法の道場となしたるは、奇怪千萬。サア釋迦が神力と、此提婆が通力と、此べて邪正を知らすべし。先兩舌の婆將軍、汝們が死骸の下積」と、兩足擱んで二つにさつと引裂き、虚空を白眼んで吹く息に、山河草木鳴動し、降來る雨は百千の、劍となつてぞ三重落かよる。されども如來

八部罪一父を殺し、母を殺し、佛身より血を出す等の八大罪
 天王如來一提婆
 懺悔して後天王如來となる
 大乘一煩騰即菩提、生死即涅槃を立て諸法の根柢を盡せる教法
 三乘一聲聞、緣覺、菩薩
 五乘一三乘と人、天
 七方便一煖位、頂位、忍位等の果果に赴く七方便
 四衆一比丘、比丘尼、優婆塞、聲聞
 八部一天、龍、夜叉等の八
 廿五有一六道を分くれば廿五有となる
 沙羅双林一冬凋まぬ木が釋尊入滅の時四圍に二本づつありしより名づく

は光を放ち、晏如として立ち給へば、劍は宙にて微塵に碎け、御身に觸る刃もなし。擧げし通力には適はずとも、腕の力に打殺さんと、十丈餘りの大石、一羽より猶輕々と、抱えて左足を踏み、「曳やうん」と投げつくる。釋尊左の御足にて蹴返し給へば、此大石海山越えて、蒼黎山の巔に落とまる。此時御足の御指損じ、佛身より血を出す、八逆罪ぞ恐ろしき。提婆大きに怒をなし、「エ、通力もまだるし。捻殺して捨てんもの」と、大手を擴けてかよりしが、俄に震動雷電して、大地二ツにさつと裂け、阿鼻大焦の猛火の火焰、燃上りく、提婆が五體を渦いたり。遁れん逃んと叫べども、煙に咽んで眼も猛み、四頭八倒狂ひ死、眞逆様に打反し、奈落の底にぞ沈みける。大慈大悲の佛性に、怒りなく恨みなく、仇なく敵はなけれども、迷へば佛敵、悟れば味方、善惡不二のしるしはこれ。天王如來の方便力、提婆が悪も觀音の慈悲、末世の衆生に蒙れり。

第五

大乘五十年の御法の聲、三乘五乘七方便、四衆八部二十五有、普く利益の甘露を嘗め、既に狗屍那城跋提河の邊り、沙羅双樹の下にて、三界の導師、涅槃に入らせ給ふべ

わくく云々
心いそくと落
付かぬ事

しと、御記念の御説法、四天下の人民名残を惜み、參詣袖を連ねける。悼はしや耶輪多羅女、若宮誕生ましくて、未だ對面ましまさねば、せめては會座に列り、後世の縁をも結ばんと、羅喉羅太子を誘ひて、疾しや遅しの途次、心わくくせきかくる、跋提河にぞ着き給ふ。只ある畦の小蔭より、身は背孤に纏はれて、齡も共に傾きし、笠の下より耶輪多羅女の、裾を慥かと控ゆれば、耶ア、怖物をも言はずに誰ぞいの。用有て急くもの。放したも」と振切れども、猶纏ひ、「イヤ卒爾いたすものならず。佛御最期の御説法、聽問の志、沙羅双林へ參詣の者なるが、如何なる因果の咎めにや、跡へ戻れば足輕く、先へとは足立たず。御情に手を引て、御涅槃拜ませ給はらば、今生の御慈悲」と、涙もいたく漏る笠の、隙より見れば橋雲彌、耶ヤ叔母御様かいの。形なき御有様や」と、緇り歎かせ給ひける。橋雲彌涙にくれ、「面を見せんも恥しや。提婆が悪に誘はれ、よしなき仇をふくみしぞや。罪障を懺悔して、如來の教化を受ん爲、是までは來りしに、今まで立たる此足の、一足も先へ引れぬ身の、罪科を許させ給へ。結縁してたべ耶輪多羅女」と、昔を悔む御涙、道理せめてあはれなり。斯る處に摩訶迦葉、御涅槃に參りあふべしと、取る物も取敢ず、雞足山を立出、息を切て急ぎの道、耶輪多羅女走り寄り、「卒爾なが

摩訶衍—大乘經
 を云ふ
 法身法性眞如—
 本性平等にして
 變易あることな
 く眞理に向つて
 進む

ら御僧様は、釋迦如來の御弟子と見受參らす。みづからは耶輸多羅女、稚き人は胎内に、見捨て給ひし羅睺羅太子、生れて父を見給はず。涅槃に入らせ給ひなば、歎ても甲斐あるまじ。是は叔母君憍曇彌、昔の罪を懺悔の爲、拜みたきとの御願ひ。烏陀夷は早や先立て參詣する。頼む方なき折柄なり。あはれ羅漢の御情に、今生妻子の暇請ひ、せさせて給べ」とばかりにて、歎き給ふぞ哀れなる。迦葉聲をあらよけ、「ア、思ひも寄らぬ事。凡僧我們の上にさへ、臨終には恩愛の羈を斷る。況んや三界の獨尊、佛涅槃の砌昔の妻子が名殘惜むなどとて、御對面有べきか。三人此處にて剃髮し、比丘比丘尼の容となり、佛弟子の願ひならば、佛も御悦びの御對面あるべし。我は則摩訶迦葉、戒授け申さん。如何にく」と宣へば、耶、それこそ望む處なれ。戒授けまします」と合掌あるこそ殊勝なれ。迦葉重ねて、「善哉々々。昔の罪障消滅して、本來空の都路に、皆立歸る友達ぞや。摩訶衍法身、摩訶衍法性。摩訶衍眞如」と、三行附屬の秘文を授け、憍曇彌を摩訶波者波陀夷、耶輸多羅比丘尼、羅睺羅尊者、皆佛弟子となり給ふ。末代に至るまで女房出家の始めとかや。すはや御法もかいひやくの、ほうけいの聲告渡る。松の嵐に誘はれて、沙羅双林へと三重急がるよ。あら有難や釋迦牟尼佛、御齡八十一歳、衆生無

四苦一老病死の苦惱
八苦一四苦と愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛

頭北面云々一頭を北にし面は西に向うて入滅し給ふ
十地一菩薩所證之地位、一切佛法依之發生也
自歡喜地至於

透誓願度の御機縁盡き給ひ、諸行無常の氣をあらはし、是生滅法の御肌枯れ、頼み少なく見え給ふ。娑婆くぢうごうじやの菩薩、ぶんしんたはう八十萬億の大菩薩、十大御弟子、十六羅漢を先として、二萬八千の羅漢達、諸天龍神、天人阿修羅、御名残を惜み異口同音、「我門衆生逢ひ難き佛に逢ひ奉り、うけ難き御法を請け、四苦八苦を免れし、御恩徳をも報ぜず、別れ奉る悲しさ。盲目の杖を失ひ、幼稚の乳房に離れしも、是には争で勝るべき。仰ぎ願はくは世尊神變力を現じ、御慈悲を垂れ給ひ、千歳の御壽命まふして、末世末法の迷ひの衆生を度し給へ。御名残惜や」とて、「わつ」と叫び給ひしは、天にも響くばかりにて、月日も光失へり。佛示して宣はく、「生は死の始め、無常は佛も逃れずと、衆生にこれを示さん爲、我れ慈悲心の入滅なり。我此詞を尊み、信心怠りなき輩は、來世に至つて我本土、寂光淨土に必ず來れ。逢ふべきぞ。生死の二法は一心の、めうようじやうちうしせつほふ」と、梵音聲高らかに、頭北面西右脇臥、御年八十一歳にて、二月十五日、涅槃の雲に隠れ給ふ、御名残こそはかなけれ。十地の菩薩五百羅漢、人界の國王大臣、貴賤男女、上は帝釋四天王、下界の龍王、他方の衆生、「わつ」と叫ぶ其聲は、坤軸も折れ碎け、翻す涙は四大海。魂失ひ氣も亂れ、大地に身を投げ手足

法雲地分爲十
也大藏法數

諸惡莫作一諸惡
莫作諸善奉行
自淨其意是諸
佛教(增一阿含
經)

を屈し、慕ひ歎き奉れば、恒河の魚鱗野邊の蟲、鳥類畜類五十二類、涅槃の庭に泣沈み、
梢草葉も色變り、歎きの色をあらはして、佛の別れを慕ひしは、實に道理とぞ聞えける。
斯る處に摩訶迦葉、人々打連れ、走着き給へども、はや佛は御入滅。二人の比丘尼、羅
喉羅尊者、「はつ」とばかりに伏轉び、歎き給ふぞ道理なる。悟りきつたる迦葉尊者、歎き
に堪えかね大聲上げ、「生者必滅は佛法の根元、世尊の入滅驚くべきにあらねども、此迦
葉には、世尊如何なる御憎しみ、せめて今一度御聲も聞せ給はぬぞ。情なの御佛や。名
殘惜しの我本師」と、人目もわかす身を忘れ、狂氣の如く泣亂れ、聲も惜まず泣き給へば、
耶輸多羅比丘尼親子の人、六道の衆生同音に又歎きにぞ沈みける。實にや、現有滅不
滅。世尊破顔微笑あり。「善哉迦葉、我法に二つなし、諸惡莫作衆善奉行」と、衆生引導
結緣利益、深達罪福相、紫摩黄金の光明と、肉鬢の光明に、孕まれ浮ぶ涅槃の衆生、五
十二類も佛果を現じ、龍燈天燈挑け添へ、佛法守護の諸天神、國を守り世を守り、民を
守つて民安全、悟り開けて身もやすく、心も廣き天地の、あらん限りは盡せぬ衆生、末
法萬年萬々年、無上の榮華を極めける。

